
俺、不器用ですから

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺、不器用ですから

【Nコード】

N5852X

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

これはこの前消去された小説を再構成したものです。

正直あらすじ書くのめんどくせえ。

主人公は変態というかダメな方向に強烈です。

そんな主人公が救世主（笑）として異世界（笑）に召喚（笑）されて結構自由に動きつつ最近のはやりの異世界転生物を嘲笑う物語です。

お前、飯食わせてくれたのに裏切っちゃダメだろ？

戦力と呼んだのに戦力として使われないでどう扱われると？

人とかデストロイできるようなDQNが元の世界でまともな奴なわけねーだろワロスwww
多方面に喧嘩売りますが、互いに罵り合いながら感想を言い合える
といいなあ……と思っています。

短編の続きという名のプロローグ

「どうも、救世主です。給料頂く為に馬車馬の如く働きに来ましたこんちくしょう」

「グルルルルル・・・」

「息くせえよトカゲ野郎。あ、嬢ちゃん危ないからその人に避難させて貰ってね」

「え・・・？」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「!?!」

「ほら、お前やっぱ鍛えた方がいいってメタボさん」

「デブの矜持としてそれは無理っす」

「だって一瞬俺殴りとばしそうになったもの」

「ほら、そこは逆に考えるんだよ。デブだから変態なんじゃない、変態だからデブなんだ」

「よくわかりました変態ロジコン」

「ごめん！間違えた！やり直さしてマジでっ!!--」

ロマンチックなだけが恋ではありません。本物の恋とは、オートミールをかき混ぜる行為のように平凡で当たり前なのです。

ロバート・ジョンソン

間部功刀まなへくとう「つまりお前から恋愛経験皆無なの透けて見えるからヒロイ
ンの書き方は考えるよってことだ」

メタボさん「君も結構ざつくり行くねえ……。てか僕メタボさん
じゃなくて長谷部大治はせへたいじなんだけど」

「まさかオープニングに900文字近く使う事になるとは……」

そんな妄想は目の前の現実に打ち崩された。
いつも疑問に思ってたんだけど、モンスターの処理ってどうしてんの？

放置？それともある程度処理したりすんの？

現代日本とかは道路で猫とか死んだりすると役所の人とかが処理してくれる訳だけど、ファンタジーは大体中世ヨーロッパ設定が多いからそこら辺の描写曖昧だよな。

俺達の世界だと近代ヨーロッパ並み。

モンスターの死体とかによる疫病うんぬんは流石に処理するけど道とかにはうんことか落ちてるレベルだな。

俺の国は違うけど。

メタボさんの国は結構そういうことあるっぽい。
奴隷とかゴミ問題とかな。

「ま、大体は焼却だけど、こいつどう見てもファイアドレイクだよな……」

「火属性か……、しかも火山地帯からどうやってこんなとこに

「ここ山地だから洞窟とかあったんじゃないね？」

「溶岩にも耐性があるんじゃないや焼却できるかわからんね……」

「こつちには創世の魔神だけど、魔力ほぼからだからなあ……」

「……（ピクピク）」

普段はふるさいのにさつきからまったく喋らない魔剣、レーヴァンティン。

ちなみに命名俺ね。

「……………ま、自分でも厨二くせえ……………って思うけどさ。

ちようどラグナロクオンラインやってたからちらっと思いつい出しちゃって。

だって、だってさあ！

神話とかメツチャ好きやし！

男なら炎フレイムタンの魔剣ときて神話級って考えたら誰でも思い付くよなあ！？だから俺は痛くない、まだ普通まだ普通。

「普通の人間はお前の年頃で厨二病になりません」

「ゴハッ!！」

やるなメタボさん、まさか地の文に普通に突っ込んでくるとは。

「あ、あ……………」

「ん?」

「フヒッ?」

背後から誰かに話しかけられると、そこにはプロローグで涙ポロポロ流していたお嬢ちゃんが立っていた。

「……………んだよ」

「バカ、萎縮させちやうだろう。どうしたの、モンスターなら僕達
がもう退治したよ？」

「……………ありがとうございます、みんなの仇をとってくれて」

「……………」

「……………」

めんどくせえ……………。
堪らない程にめんどくせえ……………。

「できること少ないですけど、お礼はなんでも」

「だってよ、メタボさん」

「そうだね、クトウくん」

「……………」

やれやれと首を振る俺とメタボさんに怪訝な表情になる少女。

「……………」
「……………」

「ッ!?!」

「別に俺達お前らの復讐の為に戦ったわけじゃねーし」

「お仕事だしね、給料もらってるから君達がだせる程度の報酬貰っても割に合わないし」

「.....」

俺達の遠慮ない辛辣な言葉の数々に、少女は信じられないといった表情だ。

余程のショックだったのか、その場にペタンと膝をつく。

俺達は彼女に背を向け、ファイアドレイクの死骸を処理するために正面に見据える。

「だからさ」

「お前もつと泣いていいんだよ」

「ありがとうとかそんなこと言わずに、なんでもつと早く来てくれなかったんだって責めればいいのさ」

「ッ!?!?!」

少女が背後で息をのむのがわかった。

だけど俺達はそれを無視して、さらに言葉を重ねた。

夕暮れ、俺達は到着したルカ子たちが瓦礫の下から死体や遺品を回収しているのを眺めながら腰を落ち着けていた。

廃墟、そういう風景だった。

最近の記憶だと日本でもあの地震が有名だが、当事者である分その認識度が半端なかった。

自衛隊の人とかはいつもこんな風な気分なんだろうかと思った。

「いやー・・・ビビったな」

「転移してきたらいきなり目の前火の海だったしな」

どちらともなくポツポツ話し始める。

その言葉には力も無く、ただ呟いているだけと言った感じた。

「なんで俺達こんなことやってるんだろうな」

「救世主だからだろ？」

「あーだったな」

「勝手に呼んどいて何ほざいてやがんだって思っけどねー……」

幾度となく疑問に思ってきた事だった。

なんで俺がこんなことを。

ふざけんな、こんなの奴隷と変わらない。

辛い、痛い、やめたい。

「けどよぉ……んなこといっても結局変わらないんだよなぁ。国に属そうが放浪しようが、この事態に出会ったら多分見捨てなかつただろうしなぁ……」

「だねえ……」

「まぁ……だから、なんだ？仕方ないからさ、やるしかねえだろ……やるしかないんじゃないっすかねえ！」

んぐと背伸びをしながら立ちあがって言うと、メタボさんも隣立ってニヤツと笑った。

「お前やっぱすげえわ」

「そうか？」

「うん、すげえ」

んな褒められっと思えるなおい。

「んじゃ、行きますか」

「行きますかあ」

これは、救世主達の物語。
理不尽で、傲慢で、冷徹で、卑劣で、無常で、不浄で、暖かく、和
やかで、やさしく、オチも山も記録すら残らない、ただの物語。

短編の続きという名のプロローグ(後書き)

だいたいこんな作風。

「あああああ！」「めんなさい」「めんなさい！」

人生は教師である。そこでは幸福より不幸の方が良い教師である。

フ

リーチエ

クトウ「せんせー、この場合は幸福なんですか不幸なんですか」

ルカトエーゼ「安心してください。間違いようも無く不幸です」

クトウ「でっすよねー」

「
」

今の気分を現わすなら『fly away』になる。

正に飛んで行きたくなるような気分だろうか。

どうも、まなへくとう間部功刀です。

今年で16になるティーンエンジャーだ、つか高校生だ。

高校生といたらラノベとかネットとかじゃ異世界にトリップした

り転生したり召喚されたり救世主になったり勇者になったりモンスターになったり兎に角夢あふれてハッピーな世代。

そんな俺が今置かれた状況は正にパンストなみぶっ飛んでいると言っ
つていい。

何せ召喚だ、しかも救世主らしい俺。

実に俺の感性を刺激してくれる。

故に今の俺のテンションは上々、フルスロットル。

今大理石の床つぼいものの上を歩いているのだが、俺の後ろを一人の少女が息を切らせながら小走りしている。

彼女の名前はルカトエーゼ・フォン・レーネンブルグ、王宮上級魔導管理官という実に俺の感性を震わせてならない人物だ。

もちろん日本に王宮魔導管理官なんて役職は無い、型月みたいに隠れてる人はいるかもしれんけど、後イギリスとかにも居そうだな。

そして俺の魔法使い像を裏切らぬ身の丈よりデカイ杖を持ち歩くその姿に、この場所が地球ではない、もしくは俺の人生の常識を超えた世界なのだと実感させた。

だってあんなかつこ俺なら死にたくなるね、憧れるけど。

ほら、ファッション雑誌のモデルの服装を真似て鏡で見たら似合わなかった時の感じと似てる。

……あれは、ひどい事件だったな。

酷い事件と言えば俺がこの世界に召喚された時の話も酷い。

あれは多分一生誰にも離せない。

放課後の帰り道だったんだが、いつも通りバイトに向かおうと道があるいていると突然謎の穴が俺の足元に出現した。

予期せず現れた穴に俺は脚を突っ込んでしまい、抵抗も出来ぬ間にゾプゾプと呑み込まれていく。

『な、なんだこれ！？妙に何かに這いずりまわられているような感覚が気持ちいい！？……あっ（ビクンッ！）』

あんなの反則だろjk・・・。
重点的にナニを狙ってくるなんて、なんてゲートだちくしょう。
お蔭で召喚された時下着の着替えが無いか聞いたら目の前の魔女っ
子に（。。。。）って顔されたよ。
そんなこんなで途中でテンションが上がって冒険にでかけようとし
たら魔女っ子の杖が顔面に突き刺さり悶絶したりといろいろあった
が、現在俺はこの国の王様がいるという謁見の間とやらに向かつて
いる。

定番だよな、「魔王を倒してくれませんか？」的な？

どうせはい／＼いいえのどっちを選んでも“はい”しか選べないんだ
ろうけどね、ゲーム的にも現実的にもな。

。。。。まったくふざけてやがる。

俺こついうのを自主的にやるのはいいが強制されるのは大嫌いなん
です。

せつかくのファンタジーをそんな現実で汚したくない！

現実はまだ沢山なんだよ！

妹が俺のエロゲの趣味趣向を全て把握してるなんて現実は大嫌いだ
よちくしょう！！

「なので失礼のないようにお願いしますね」

「え？ああ、うんわかった」

いつの間にかデカイ門の前に到着していた。

魔女っ子が何かを説明していたようだが聞いてなかったので適当に
返事を返す。

あ、しまった、分からない時はちゃんと聞き返せってバイトの先輩に怒られてたんだった。

すいません藤二さん、怒られると思ってとか素っ頓狂なこと言ってますいませんでした。

さて、自己紹介はインパクトが大事だからな。

とっておきの特技で自己紹介しよう、クラス会ではこれでドン引きされたが異世界ならまた違った反応が帰って来てくれるはず！

門が開かれた瞬間、猛ダツシユで中に入り歌い始める。

「 ！ ！ 」

曲は伊藤由奈の p r e c i o u s 。

海猿の主題歌な、そのサビ部分を熱唱しながら部屋の中央っぽいところまで走っていく。

そしてスライディングしながら天井見上げてガツポーズ、つか天上たけー。

まるで感極まったかのように涙声で熱唱しながらゆっくり立ち上がりラストスパート。

歌い終わった瞬間にポーズを決め、万感の拍手を待つ。

「 」

空気が凍ったように動き出さない。

あれ？

..... あれえ？

「え、え〜・・・っと、救世主様？、をお連れしました」

疑問形だよ！

もうすでに疑問形だよ！俺もそう思っただけだ！

「え、ええありがとう、ルカトエーゼ。忙しいところを・・・」

「いいえ・・・」

ぎこちない会話が交わされている。
多分俺痛い子だ。

俺の扱いに超困ってるよこいつら。

死にたい。

こうなったら開き直ろう。

そうだよ、そうするしかねえよ。

良く見れば2人とも美少女じゃん、テンションあがる・・・、

目が・・・、クラスの女子の目だ・・・。

な、泣いてねーし！いじめられてもねーし！

なんだよクソ共！リアルなんてクソゲーだろうが！

まだファンタジーに席を置いてる俺は勝ち組みだろうが、だから俺は間違っていない。

「おい、お前ら」

「……………はい？なんででしょうか」

王女様に作り笑顔で返された。

「早く話を終わらせて俺を開放してください」

これ以上は耐えられない。

「あ、はい。ええつと、まずはようこそ、ハイ・エウルへ。勝手ながら、救世主様のお力をお借りしたく召喚させてもらいました」

「こんな痛い子に敬語使わなくていいですよ、むしろ罵ってもらった方が……………」

「そんな訳にもいきませんよ、形式的に。そのほうが楽だけどね。さて、あなたを呼んだのには理由があるんだけど、……………なぜか謁見の時間に大幅に遅れててきちゃったからもう時間がないのよね」

なんかすいません。

「という訳でこの国への最低限の保険だけでもお願いしたいんです」

「ん？保険？」

この言葉あんまり好きじゃないんだけどなあ。
やっぱ国としては救世主なんて代物が害をなさないようにしたいの
か？

「因みに拒否権は」

「無いわね。力ずくでもやるわ」

「なるほど、そういうのは嫌いじゃねえよ」

この幼女、ただの幼女ではないようだ。
幼女なのにおそらく重要な俺への保険なんてものを任せられてるあ
たり実力はあるのだろうな。
何しろ人柄にも惹きつけられる物がある。
こんな感覚初めてだぜ。
はつきりした物言いも悪印象はない。

「……俺人の下に着くつてのはあんまり好きじゃないんだけ
どね」

「ん？」

「あんたのことは嫌いじゃないわ。自主的にならいいぜ」

「ふふ……、視たとこ学生のようにだけど、なかなか見所あるわよ

貴方。流石は救世主ってことかしら」

「俺はヒーローになる男だからな」

互いに値踏みするように睨みあう。

おお、この感じいいわ。

敵じゃないけど互いが負けたくないみたいに見える感じ。

「……んじゃルカトエーゼ！儀式魔方陣を出しなさい」

「あ、はい！」

ちよつと唾然としていた魔女っ子、ルカトエーゼだっけ？

長いな、ルカ子でいいだろ。

いや待て、それだと某飛べよおおおおおおお！の科学シュミレーションと被る気が……。

ま、いいか。

ルカ子は俺と姫様の間に奇怪な式の書かれた布をバサツと広げる。

姫様がその中心に立ち、俺も招き入れる。

しゃがむように要求され、疑問に思いながらも俺は目線に合わせて膝をついた。

「んで？これからどうするんだ？」

「貴方はそのままでもいいわ。さて、汝我がペルムドンに忠誠を誓う以下略」

「なんだと」

チユ・・・。

くちびるが・・・おれにふれた。

目の前には目を瞑った姫様の小さな顔があり、唇には少し湿った感触が。

そこまで考えた時、下の魔方陣が強烈な光を放ち始める。

驚き立とうとした俺を、姫様は後頭部を掻き込みその唇を強く押し付けてくる。

一体何が起こっているんだ。

やがて光が納まり、姫様が少し赤くなった顔をしながら俺から離れた。

「大したことないわね、キスつても」

「てめえ俺のファーストキスになんて言い様だこのやろっ」

その澄ました態度がムカついたのでデコピンしてやった。

するとキョトンした顔でおでこを押さえて俺を見つめる姫様。なんだ、謝らんど。

俺のファーストキスは貴様のような幼女のためにあっただのではない。

「ふふふふふふ、おもしろいわね貴方。気に入ったわ」

「そっかい」

「一応これで保険は終わりよ、何か質問はある？」

「あん？あー……そうだな」

「……冷静になって考えてみると、一番気になる不安があった。」

「……俺、元の世界に戻れんの？」

「解らない、としか言えないわね」

「……そっか」

「……何も言わないの？」

「それならそれで帰る方法探せばいいし、絶対と解るまではぜってえ帰って見せるね」

「そっ」

「やっぱりこの姫様良いな。」

「不覚は聞いてこない、相手を気遣えるだけ俺は少し救われた。少なくともここに召喚されたことは悪くなさそうだ。」

「んじゃ、そういうわけで俺はいくわ」

「ええ、部屋はルカトエーゼが案内してくれるわ。ルカトエーゼ、救世主様を」

「あ、はい！」

背を向け開かれたドアを通ろうとした俺に姫様の声がかかる。

「そうだ！貴方の名前！聞いてなかったわ！」

「………間部^{まなへ}功^く刀^{とう}、俺の名前は間部^{まなへ}功^く刀^{とう}だ！」

閉められるドアからちらつと見えた姫様の顔は、確かに笑っていた。なんとなくまたテンションが上がった。

「よし！ルカ子、俺の部屋まで競走だ！」

「ええ！？また、勝手に！？」

曲は don't stop believing

「！」

「ま、待ってくださいってばあ！」

「ここから、俺の物語が始まった。」

一話 ころして話は過去に戻る訳だが（後書き）

綺麗にまとめられたと思う。

一話　そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（前書き）

矛盾点など随時募集

「えっ」

「……………」

「……………」

「……………虐めるんですか？虐めるんですね？」

「ちげーよ。普通に情報収集に決まってるだろ。あんたらの言う事がホントかどうか俺には解らん訳だし、そこまで信用したつもりはねえよバカ」

「あ、そうなんですか」

「うん」

「……………うん？って違いますよ！そんなことしなくてもちゃんと教えます！その為に今日一日貰ったんですよ！？」

「しらねーよwww」

「とことんフリーダムなのに妙に疑り深いですね……………」

「そういう人生送って来たもんで。あ、違うわ。元来そういう性格なもんで」

「……………そうなんですか」

「……………少なくとも人のプライベートを見極めるくらいは人間

出来てるってところは信用してるけどよ、姫さんがすげー良い女だったし」

「え」

「いや、俺はロリコンじゃねえよ、シスコンだし」

「そ、そうですか」

「おいなんで目を逸らすおい。ちっ、まあいい、話は聞いてやるからとつとと部屋に案内しろよ」

「ええ〜・・・」

「・・・んだよ、悪かったよ」

「あ、いえ、じゃあごつちです」

太陽が輝くかぎり、希望もまた輝く。

フリードリヒ・フォン・シラー

これまでのあらすじ。

俺、召喚。

この世界の説明、部屋で。

大体こんな感じ。

今、ルカ子さんが目の前の机の椅子を布団に座っている俺の方に向けていた。

結構真剣な表情してます。

こっちもそんな見つめられたことないからちよつと照れるぜ・・・。

「さて、どこから話しましょうか？」

「じゃあ、この国の事と大体の世間情勢かなあ」

他にも聞いておくべきことはあるが、まずはこれが解らんとどうしようもない。

情勢が解れば、なんで俺が呼び出されたのか解るしな。

「わかりました。ここは魔法が廃れきれず別の進化を辿る世界、ハイ・エウル。そしてハイ・エウルに存在する二つの大陸の内、主に人間が住んでいるのがこのグロウリアという大陸です。グロウリアは科学技術の発展で魔法の力が昔と比べ落ちてきていますが、人々は過去に消えゆく魔法を別の形によって残したのです。そしてグロウリアの中でも最東に位置し、魔の力が唯一残り続けている国、私達の住むペルムドン王国です」

トントン、と杖で床を叩くルカ子。

ほうほう、情報1、魔法が存在している。

これはさっき変な魔方陣っぽいので儀式を成されたので知っていたが、ここは特別その力が強いようだ。

情報2、ペルムドンっつーらしいな、この国。しかも王政か、時代設定やっぱ中世？

しかし科学技術なんて単語が出てきてるあたり近世っぽいな。科学技術と魔法との合体か・・・胸アツだな。

「この国はもう一つの大陸、魔大陸エスノリスに近い為かマナが豊富で資源に富んでいます。生命の活動が活発で、巨大な樹海の中に存在しておりモンスターの数も非常に多く未開の地も残されているので、資源はあるけど人口が育ちにくい環境の国なのです。そのため昔から諸外国に狙われることが多かったんですけど、モンスターの多さと軍の精強さで未だこの国を荒らすことが出来た国はありません」

やばい、聞いたいて何だが、テロップかなんかないと聞いてるだけじゃ訳分からなくなってきた。

メモ取りたいけど羽ペンはちょっと・・・。

そうこうしている内にもルカ子の話は止まらない。

そんなに俺の脳みそは高いレベルで作られてないんだよ！

英語苦手だよ！

ドイツ語はなんか発音がかっこいいから何個か単語知ってるけど！さっきの話付いていけてますよ態度もフエイクだよバカ！

ゲーム脳だからなんとかわかったふりできたただだよちくしょう！ああああああああああああああああああああああああああ、やばいそんな早く話されたらマジで聞き取れない！？

うわああああああああああああああああああ！！！！

こうして間部功刀のルカ子異世界教義は本人の残念な脳みその容量オーバーにより、必殺聞いているふりが発動された。

「と、いうわけなんです。わかりましたか？」

「うーんだいたいわかったー」

後半、マジで早回しのビデオテープみたいにしかなかった。それでも必死に喰い付いたおかげか、聞き取れた部分は少ないものの何とか収穫できた。

曰く、グリムリバーなる存在していなかったはずの謎の大陸が現れ、そこから大量のモンスターがグロウリアを侵攻したそうなの。

古のモンスターからなる軍勢に、中途半端科学は役に立たず、諸国は各地で敗戦を重ねたそうなの。

そこでこちらも同じように古の存在を復活させて対抗しようと、救世主なる存在を知った。

各国の技術提供の結果、救世主を召喚する一回ポツキリの魔方陣を完成させ、各地で大量の救世主が召喚されたそう。

救世主は予想以上の戦火を見せてくれた物の、被害も当然軽くは無く、今のところ膠着状態が続いている。

そんな中、戦火の被害から一番遠く、今まで物資支援に当たっていたペルムドン王国の近隣でもグリムリバーのエインシエント・モンスターが確認された為に、ついに救世主の召喚に踏み切ったと。

こんな感じの事をすげー詳しい内容で説明された。

すごい丁寧だし、配慮もなされてたと思うんだけどさ……。

こんなもん一片に覚えきれるかボケェ!!

なんかルカ子の「私、やりましたよ」的な笑顔がスゲーム力つくし、俺が呼ばれた内容も当然ム力つく。

なのでぶつちやけるついでにルカ子の鼻を摘まんでやった。

「ながつ!?!いたふあふあふあ!?!いふあいでふいふあいでぶつ!?!?」

「あんな、なにそのすげーどうでもいい理由、俺完全に無関係じゃん。舐めてんの?ぶざけてんの?」

救世主って、それ殆ど兵器だろうが。
救世主じゃねえじゃん。

「ふえい!」

「おお？」

ポコツと杖で頭を叩かれると、俺は宙を待ってベッドの上に放り出される。

ま、魔法とは卑怯な。

「……………わかっていますよ、あなた達を呼び出してしまった責任は」

「ふーん……………」

鼻を摩り涙目になりながら椅子に座り、暗い表情で語り始めるその姿に感じ取れるものがあつた。

後悔、か。

……………めんどくせえなあ。

んなもん感じるくらいなら初めから呼び出してんじゃねーよ。

「おい、ルカ子」

「ルカ子！？それって私の事ですか？」

「いいか、俺はお前に言わなきゃならないことがあります」

「何故敬語」

「突っ込み無用」

とんでもなく対人関係能力コミュニケーションに掛けるからじゃねえよ？
ビビってないからね？

「ええつとですね、私はこの世界に呼ばれたことを非常に遺憾に思っています」

「はい」

「俺にも向こうに家族がいますしね、正直これ以上休むと単位落とすから高校も休めないからすげえ帰りたいです」

「・・・あれ？言ってることがまとも？」

「おい、・・・まあいいか」

前回のあれは俺も痛いつて認めたからな。
あれなら完全に俺ガイキチである。

「けどどな？そんな立場にいる俺でもな、言うなら後悔なんてして欲しくないね」

俺が要らない子みたいだろう。

「……………すみません」

「あ……………んにゃ、そうですね……………」

なんとなくどちらとも話が詰まる。

やばい、気まずいぞ。

どうしよう。

逃げたいっす。

……………さて、どうしたもんかね。

「あなたは……………覚悟が出来るんですか？」

「あん？」

ルカ子は顔をあげ、泣きだしそんな顔をしながらそれでも真剣な表情でこちらを見た。

不謹慎とか思ったりしたが、その表情はかわいいなと思ったりした。

「この世界はあなたが思っている程やさしい世界ではありません。

魔法は人を殺します。モンスターは人を殺します。そう言った者から命を掛けて人々を守ることを、私達は納得しています」

「……………」

「現実には容易く人を挫き、力はとても速やかに人を翻弄し、死は艶やかに人を魅せ付ける。それが間違えようも無くこの世界の在り方

で、世界の法則です」

「……そうか」

「……死ぬ覚悟はありますか？命を捨てる覚悟は？ゴミのよ
うにうち捨てられて消える覚悟は？誰も、あなたも名前も知らない
場所で、死ぬ覚悟はありますか？」

「……」

大事なことを聞かれている、そう思った。

だから考えた、沢山考えた。

死ぬ覚悟？

無い。

妹も残してきた、死ねない。

止まらない覚悟？

無い。

ただのクソガキに何が出来るってんだ。

利用し利用される覚悟？

無い。

ただ摂取されるだけだろう、俺の頭じゃ。

「ないなら、私が何とかします。守って見せます、帰して見せます、
責任を果たします。ここはやさしくない、命がとても軽い場所だけ
ど、あなたの命を守って見せます」

だけど、

「私に任せといてください!」

こんなに泣きそうな顔をしている癖に、偉そうに胸を張っている小さな女にここまでさせる程、俺は自分が大切かよ?

女にここまでさせといて、今さら覚悟うんぬん抜かして逃げるのか?

このまま兵器として終わるのか?

冗談じゃない。

どう覚悟するべきか、ここはファンタジーだけど、確かに現実なのだから。

向こうでもそう生きてきたはずだろうに、なぜ出来ない?

..... 恐いからだ、死ぬのが恐いからだ。
なるほど、な。

それなら決まった、どうやって俺が覚悟するか。

「ルカ子、覚悟、できたぜ」

「えっ」

「ヒーローは逃げねんだよ。戦って、立ち向かう、それが俺の憧れた姿だ」

ルカ子と同じように立ちあがって、驚いた表情の彼女に高らかに宣言した。

「俺は、不器用で、情けなくて、どうしようもなく臆病だが、この世界で、ここで、ヒーローになって見せる!」

俺の物語が、動き始めた。

二話　そ、そんな厨二を詰め込んだ世界なのか！（後書き）

こんなもんかねー

三話 訓練開始イイイイイイイイイイ！！死ぬわ

「救世主様、訓練の時間です、よ……」

「はっ、ふんっ、ぬおっりゃ！」

「……」

「はいつ！とうっ！ねりゃあ！」

「……なにをやっているんですか？」

「うをつ！？……なんだルカ子か」

「その呼び方決定なんですか」

「だって名前なげーし」

「ルカ子で……」

「いいじゃん、かわいいかわいい」

「か、かわ……って、なんで裸なんですか？！」

「そらお前、スチュアートリトル大佐ごっこしてたからな」

「知りませんよ！？誰ですか！？」

「いや、適当。ようは一人軍隊ごっこ、設定は拷問部屋から裸で抜

金を失うのは小さく、名誉を失うのは大きい。しかし、勇気を失うことはすべてを失う。

チャーチル

どうも、間部功刀です。

三話目からは作者もめんどくさくなってきたのでルビ振りません。読者にやさしくない作者ですまん。

……誰に向かって説明してるんだ俺。

結局昨日の宣言をルカ子に歯牙にもかけられなかった俺は、当然の如く燃え上がり、ルカ子が去った後どうすればルカ子に認めてもらえるか必死こいて考えた。

ヒーローになるといふ言葉、その場のノリも手伝ったかもしれないが俺にとつても軽い気持ちで言った訳ではない。

殺しのこの字も知らん素人の言葉だし、なによりこの世界の住人からしてみれば覚悟と呼べるものでもないだろう。

しかしそれを一蹴されると言うのは男として捨て置くことはできない。

なので俺は考えた結果、バイトがてらに鍛えていた身体を固持する為に筋トレに走った、裸で。

その内に最初の目的がスポンと抜け、楽しくなってきたので鏡に向かつて正拳突きしたり飛び蹴りしたりポーズとったりしている内に朝を迎えてしまった。

その様子をルカ子に目撃され、丁寧に説明してやったのにも関わらず、何故か魔方阵で爆破されかけた。

自分でも結構鍛えられてしまってると思うんだけどなあ。

窓から逃げ出し、昨日去り際に今日の予定と場所の指定を聞いていたので現在そこへ向かっている、裸で。

全裸で。

大切なことなので二回言いました。

凍えるなマイサン、朝立ちで気合い入れろ。

そんなこんなで指定された訓練場とやらにやってきた。

ルカ子は置いて来てしまったが、俺のヒーロー変態オーラにかかれば、人の意識を引きつける事など容易い。

早朝なのでチラホラとしか確認できないが、その全員が俺をポカんと眺めていた。

やめるよ、見せもんじゃねーぞ。

そんな感じで胸を張ると、慌てて全員目を逸らした。

ちっ、つまらん。

・・・・・・・・ん？なんだあれ。

中央に何やら立て看板が・・・『救世主貸切』って・・・まんまやん。

どうやらあそこで訓練するらしい。

相手の人も既にそこにいるし、取りあえず行ってみるか。

近づくにつれ、相手の顔も見えて・・・。

「エクセレント・・・」

すんげえ美人がそこにいた。

ルカ子は日本人の俺には見慣れない赤毛だったのだが、この人は違う。

美人外人ってこんな感じって俺の印象を裏切らないキレイ目で整った顔立ち。

ボーイッシュに短く切られた金髪で緑眼、正に西洋の美人。

そんな美人が俺を（。。。）って顔で見ている。

やがて美人さんは（；。。。）ってなって俺に話しかけてきた。

「き、貴様なぜ裸なのだ!？」

ふむ・・・、中々深いな・・・。

「俺が変態だからさ!」

ようやくルカ子が追いついた。
運動不足だな、この程度の距離で息切れとは。

「とり、あえず・・・服、着てください・・・」

「うっす」

ちょうど肌寒くなってきたところだ。

ルカ子から渡された服は柔道の道着服のような厚手で、肌触りもまだ召喚されて一日なのに懐かしく感じた。

ルカ子も来たところで、美人さんと自己紹介といきますか。

「おっす、間部功刀っす！救世主っす、おっす！」

「・・・クネール・イヌ・ベルフェグルエだ。貴様の訓練を担当することになった。主に戦術などを教える」

「おつす！質問があります！」

「……なんだ」

「姦計はありますか？」

「ない」

「なん……だと……」

この世界の魔法少女は脱がないのか？
なんてことだ……、クネールさんは少女っぽい年齢に視えないけど。

「ルカトエーゼ、あれは本当に救世主なのか？」

「はい、残念ながら」

「……私はあれを鍛えなきゃいかんのか？」

「……はい、残念ながら」

「ねえねえ、鍛えるって何を？股間？」

「……」

「お察しします」

天を仰ぎ、頭が痛いと言うように目頭を押さえているクネールさん。冗談通じねえなこの世界の人達。つか俺裸足だった、これでやんのか？いや、逆にこっちの方がいいのか？うんうん俺が悩んでいると、クネールさんが諦めた表情でこちらを見て質問する。

「何か聞いて置きたい事はあるか？」

「え、じゃあ、クネールさんの年齢は？」

「・・・・・・・・・・28だが」

「あ、結構いつてるんですね」

「・・・・・・・・・・!!!!!!」

ピシッと空気に亀裂が入った音がした。

あ、あれ？

もしかしなくてもまざった？

「クトウとか言ったな、貴様武器を持ったことは」

「な、ないっす」

いつの間にかクネールさんの手には刃の若干厚い両手剣が握られていた、種類のにはクレイモアか？
あのサイズを片手で振り空気を裂く様に、背筋に大量の冷や汗が流れ落ちた。

「そうか、ならそのまま避け続ける」

「え、ちょ、まっ」

なんか訓練が開始。

「ま、ちょ、ひっ、すい、ません、でし、た！」

「ほづ、中々やるじゃないか」

あれどうみても真剣だよな。

キラッ　って光ってるもんね。

あれから俺は必死にクネールさんの剣閃を避け続けていた。何時間避けているのか、それとも何分なのか区別はつかないが、俺の足腰は確実に限界に近付いていた。

なんせここまで身体が緊張した経験は初めてだ、喧嘩とかよくしてたけどその比じゃない。

息が乱れ、肩が揺れ、顎が開く。

それに比べて奴さんは随分と涼しそうな顔だった。

くそっ、何が救世主だ。

これじゃルカ子も認めてくれねえわけだぜ。

なら、気合い入れる俺。

ここ萎えちゃ本気で締めえだぜ。

そうやって足に力を入れ直した時だった。

「もう少し本気で行くぞ、避ける」

「え」

一步、あと一步進んでいたら、俺の首は吹き飛んでいた。しかしそれは反応できたからじゃない。

足が竦んで進めなかったからだ。

「ほう、偶然とはいえ避けてみせるとはな？素人にしては良い素材だ」

クネールさんがなんか言ってたけど、俺は今それどころじゃないかった。

さっきのが可愛く思えるほど大きく、心臓が跳ねた。

身体は震え、眼は見開き、歯並びが合わずに力チ力チ情けなく顎が震えた。

恐怖、した。

俺は今、クネールさんの剣に、おそらく殺気も無く文字通り訓練通りに振った剣を心底恐怖した。

それだけが頭の中を渦巻いていた。

何が救世主だ、何がヒーローになるだ。

情けない、こんなにも情けない。

多分もう動けない、足が震えて動かない。

いつでもふざけてカッコ付けてきた思考は止まってしまっている。

ああ、これが、恐怖。

俺はようやく理解した。

自分はどうしようもなく矮小で、どこまで行ってもこのままなのだ。

間部功刀は、ヒーローにはなれない。

「ふざ……ける、な……っ！」

ガンツ！

俺は震えて止まらない身体を、自分の額を右手で殴りつけた。痛み自体は大したことない、喧嘩で慣れてるから。

恐怖は、俺から逃げて行かない。

このまま立ち上がるためのモンまで持ってかれそうだ。

ゴツ！

もう一度。

ガツツ！

もう一度で、ようやく止まった。

自分の顔がすごい腫れてるのが分かったが、どうでもよかった。

ふざけんな、成れる成れないじゃない。

人は結局てめえの欲望を愛すのだから。

やるかやらないかだろうが！

「いい眼だ。いいだろう避けて魅せろ」

「ヒーローは……ねえ……ねえんだよ……」

クネールさんが俺の頭を勝ち割る為にクレイモアを振り上げた。
避ける？冗談じゃない。
ヒーローは避けない。

「……………ふざけているのか？」

「ヒーローは避けねえ。避けねえんだよ。傷ついても、恐くても、立ち上がる」

「……………避けると言ったが撤回だ、そのまま眠っている」

刃が返され腹の部分でぶん殴られた。

ゆっくりと地面が近づきながら、俺の意識は暗くなっていた。

ク「おい、そんな目で私を見るなよ。純粹にこいつの精神力は素晴らしいぞ。単純に恐怖に勝つだけでも、私達は数年かかったじゃないか」

ル「そう……ですね」

ク「クククク、明日から暇しなさそうだ」

ル「……大丈夫ですかねえ」

三話 訓練開始イイイイイイイイイイイイ！！！死ぬわ（後書き）

今んとこ4000ずつかー・・・。

あんま重要じゃないからなー。

5000は掛けるようになりたいなあ。

四羽 あながち間違ってない、餌的に。

「なあルカ子、あれ何よ」

「服屋ですね」

「あれは？」

「ルルっていう小動物とかと一緒にお茶を楽しんだりする甘味屋さんです」

「猫喫茶みたいなもんか。じゃ、あれは？」

「あそこはおいしいご飯が食べられるバイキングですね」

「すげーな、異世界」

「全部救世主さん達が伝えた文化ですけど、この世界でも庶民や王族にも広く伝わっているんです」

「ああ、だからさつきルル喫茶に姫様がいたのか」

「え、今なんて言いました？」

「や、だから姫様が居るって」

「………ちょっと失礼しますね」

「あ、おい！………行っちゃったな。な・ら！俺も隙に

動いちゃってもいいよねWWW」

「すみません今戻りました」

「はええよ」

「なんかあなたから不吉な波動を感じたんで」

「お前は俺の母ちゃんか」

「手のかかるといふ部分では……」

「マジで？」

男というのはいつもそうだが、我が家から離れている時が一番陽気なものだ。

ウイ

リアム・シェイクスピア

どうも、間部・・・功刀です。

今、僕は森の中で迷子です。

すごい心細いつす。

事の発端は今日部屋に来たルカ子の一言。

『今日はモンスターを狩りに行きますよ』

リアルモンスターハンターになれとのことでした。

別にそれはいいんだよ。

最初はケルビくくらいだろうと思ってたし、今の俺だとシシガミ様レベルだけど。

クネール姐さんと並行してルカ子の魔法授業も積み込まれてたしな
んとかなるだろうと思ってたんだ。

しかし初めて城の外を出るという事で俺のテンションはウナギ登り
だった。

初めて見る店、初めて見る異世界の風景、街の人々の活気。

これらは積み込み勉強の受験生の心を癒してくれた。

ま、結局ルカ子に邪魔された訳だが。

モンスターハンターは樹海でやるらしいから、街を出る為に門を出
た。

街はぐるっと壁で囲まれており、樹海の中に存在しているこの国の
都市ならではの構造らしい。

んで都市門を抜けたんだが、その先にはスゲー自然が広がっていた。
富士の樹海とかならみたいいな感じなんだろうが、残念ながら俺はシ
ティー育ちだ。

こんな見事な自然は見たこと無かった。

これによってリアルモンスターハンターのテンションはマックスだ。
だってホントに凄かったんだもん。

『いやっほおおおおおおおおおおおおおっ！！』

そういう訳で解ったんだが、俺はアホだった。

結局ルカ子の静止を待たずに俺は森の中を爆走。
迷子だ。

そして、

ハアアアアアア……

ピンチだ。

「伏せてください!!」

その声を聞いた瞬間、俺は言う通りにその場に伏せた。

何かの弾け飛ぶ音や、モンスターたちの悲鳴が聞こえた。

俺は情けないことにそれらを見る事はできなかった。

身体が震えて動けなかったから、恐くて見てられなかったから。

そうしている内に音が徐々に小さくなって行き、やがて完全に音が止んだ。

恐る恐る顔をあげると、そこには焼け焦げた狼や一部の焦土化した森。

そしてとてもホツとした顔のルカ子が居た。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

無言の重圧。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

現在俺は正座中だ。

あの後ルカ子が死体の処理とかも黙々とやっていたので俺も黙って手伝ったのだが、終了後はこのように黙って見つめられ続けられている。

意図は何となくその組まれた腕から察することが出来るので、俺はその威圧に耐えられずにその場に正座してしまった。

ていうか女の子は怒らすと恐ろしいという事が妹や母で理解してま
すから、黙ってその無言の指示に従った。

そうして、俺は正座している訳だが。
どないしよう。

「クトウさん」

「はい……」

「私はとても怒っています」

「すみません」

はい、予想通り怒ってました。

「ひとつ、遭難の危険性もあつたのに勝手も解らない土地に一人で突撃したこと。ちゃんと私の指示に従つてと、勝手に動かないで下さいと言ってますよね？」

「はい……」

「ふたつ、正規の軍でも中隊規模で処理するモンスターに見つかるといふような大声で行動していたこと。街から外はそういう世界です。個人宅でも特別な柵門が使われているんです。これも私に従ってください」

「はいい……」

「みつつ、モンスターに囲まれたからといって素人が特攻？ありえませんが、あなたヒーローになるんでしょう？だったら少しでも生き残れる道を探してください」

「……」

「まあ要するにですね……帰ったらみつち

り勉強し直します！！！」

「はーい……」

そんな訳でした。

「救世主様、帰りますよ」

「……」

みつちりその場で叱られました。
今回は俺も悪いのですげー反省した。
こんな軽い悪ふざけが死に繋がるのがこの世界なんだ。

「救世主様？」

「あんよお・・・それやめねえ？」

「えっ？」

だからこそ、俺は言って置かなければならなかった。
これは俺の目標を正しく認識する上で必要だったから。

「モンスターに襲われた時思ったんだ、俺は・・・弱い」

「・・・・・・・・」

「この前まで、俺はただのガキだったんだ。平和なくせに不幸と嘆いて、プラスのくせにマイナスばかり数えていた、ただのガキだったんだ」

ちょうどいい切り株を見つけて腰かけた。
ルカ子は俺の正面に立ち続けた。

「クネール姐さんの時も思ったんだ。恐かった、すげえ恐かった。

だから俺はヒーローでも救世主でもない、ただの情けなくて、愚鈍で、弱々しい、唯のクソガキなんだ」

「.....」

「だから、俺を救世主様なんて呼ぶなよ」

ああ、なんて、愚かな。

こんなこと、ただの愚痴以外になりえないというのに。

なぜ俺はこれを口にするのを止められなかった。

こんな事言ったら、本当のヒーローに成れないかもしれないじゃないか。

なのに君は、君だけは。

「お師匠様が言っていました。この世界で最も難しい魔法は言葉だつて」

俺を、励ますというのか。

「言葉は天で渦巻く混沌を世界に下して認識させるモノです。それ故に放つてしまえば存在は確定してしまいます。だから、私達は、私はあなたの教育係だから、マナベクトウという言葉がヒーローになりたいと望めば、救世主ヒーローにだってしてあげられるのだから」

ルカ子は俺の手をギュッと握り、言葉を紡いで行く。

俺はというと、情けないことに、本当に情けないことに眼から汗が流れていた。

「私はクトウという言葉を特別にするために、あなたを教えるのです。だから、諦めないでください」

「……ああ」

歯を食いしばって、それだけはなんとか声に出した。

俺は弱い。

だからこそ、強く成りたかった。

でも、強くなりたいだけだった。

戦士キローは護る物がなければ戦えない。

矜持キョウジだろうがなんだろうが、護る物が無ければそれはただの人殺しだ。

だから俺は、ルカ子のこの決意を護ってみようと思った。

今日の遠出は、少し成長できたように思いましたまる

四羽 あながち間違っていない、餌的に。(後書き)

お疲れ)

五話 新キャラ登場です(前書き)

もう少し全体を加筆したいなあ・・・。
でも時間ない・・・。

五話 新キャラ登場です

「だりゃあ!」

「よっ」

「チエリオッ!」

「ふっ」

「チエストオッ!」

「!ほお・・・」

「ぐっ・・・ぜあ!」

「頑張りますね〜クトウさん（書き書き）」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!--!」

「ああ〜・・・ダメだ」

「ゴハッ!?!」

「あ、痛そう（書き書き）」

「お前、さっきの良かったのにい」

「クネールさんも楽しそうだなあ（書き書き）」

「ぜえ……ぜえ……まだ、ま……だ……!」

「そういうのは嫌いじゃないんだが、今回はこれで時間切れだな」

「ッ!……ありが……とう……ざい、ましたッ……!（バタリ）」

「……まったく、楽しい奴だな。ルカトエーゼ!」

「はいはい（ペタペタ）」

「いつもすまん。私の回復魔方陣は軽い物しか治せんし」

「困った時はお互い様ですよ、正直量が追いつきませんが」

「その分は強くなっているわ」

「……そうですね」

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。

宮本武蔵

地面が湿っているのが、肌触りで解った。

「ッ!!」

その瞬間バツと身体を跳ね起こした。

「きゃっ!!」

「あん？」

悲鳴が聞こえ、声の主を探すと尻もち付いたルカ子だと解った。
予想していた状況と違う事態に少し戸惑うが、やがて一つの事実を
理解した。

「あ、俺また気絶したのか」

「そうですねよ、今治療中なので動かないでください」

「ん」

素直にその場に座り、ルカ子の治療を受ける。

治療といってもルカ子の魔方陣を身体中にペタペタ貼って貰ってるだけなのだが、この魔方陣の効能が凄いのだ。

はつきり言うとな俺の身体は全身打撲裂傷アオジントンと正にボロボロであるのだが、これだけの全身の傷を数刻で完全に治してしまうのだ。

クネール姐さんに言わせれば、『流石』らしいのだが、俺はこの世界の魔法使いはルカ子しか見ていないのでよくわからなかった。

いつもはクネール姐さんが俺が起きたら批評をしてくれた後ルカ子と勉強会なのだが、今日はどうしたとかクネール姐さんが見当たらない。

「あ、クネールさんは今日は他にもお仕事があるのでこれで上がるそうです。代わりに私が伝言で伝えたいと欲しいと頼まれています」

「そっか」

あの日以来、なんとなくルカ子と話しづらい。

原因もよくわからんのだが、ふざける気が起きない。

ルカ子の前だと何となく話せなくなるのだ。

そしてそのことを不快に思っていない自分がいる。

こんなことは初めてだった。

「ええつと……」『痛みや攻撃に対しての恐怖が抜けたからか動

きが良くなったが、無駄に突撃し過ぎだ。攻撃や移動のペースを考
えるバカ者』だそうですね」

「昨日と同じじゃねーか」

「昨日と変わりませんからね」

「……………」

そしてルカ子の方も何となくだが、垣根が少し降りた気がする。
ツッコミに容赦が無い、というより最初より遠慮が無い。
喜ばしい、のだろうか。

嬉しい、と思う。

ま、考えて解らんことで俺がどうこうしても仕方ないか。
そう思っこのふわふわした気持ちをどこかへ放る。

「んじゃ、この次はベンきょーかー。だりいぜ」

「もう、真面目にお願いしますよ!」

少なくとも不快じゃないんだが……………、物足りないな。
俺らしくねえというか……………。
変態ネタもしてないし。

そんな思いを抱えながら、俺はルカ子と共に部屋に戻った。
その途中で珍客が待ち受けているとも知らずに。

「待ってたです！このブタ野郎！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？何黙ってやがるですこのペド野郎！」

ルカ子と共に勉強会の行われる俺の部屋に向かっていたら、建物の屋根の上にアホが居た。

銀髪が腰に届くツインテールになっており、ネコ目な黒眼、身長はルカ子よりも高く158くらい？

あぶね、俺163だわ。

そして柵引くスカート。

「なあ、ルカ子。あのバカは何だ」

「……私の後輩で、ネリア・ブロン・クイツシュローゼという子なんです」

あ、バカは否定しないんだ。

「何ごちゃごちゃ抜かしてやがるです！はっ！そうですか、貴様今ルカ様に卑猥なセクハラ発言を働きましたですね！私にはお見通しです！」

「俺はお前のパンツしかお見通しじゃねーわ」

この高さでこの角度なら、当然の如く丸見えだった。
因み紐で黒、今夜のおかずはこれで決まりだ。
残念な体型の癖に中々大人なチョイスだな。

「っ!!!?……座ってれば見えないです？」

「どうせなら降りてこいよバカ」

「くっ、貴様の言葉に従うのは癪ですが……大人しく舞ってやがるです!」

そう言っでこちらに何かを投げつけてくるツインテ。
キヤッチしてみるとザルと鉢巻だった、・・・ザル踊りでもやれ
ってか。
とりあえず捨てる。

「よし、行くぞルカ子」

「ええ?!」

「ツインテより俺の魔法の習得の方が重要でしょうが」

「・・・はい、わかりました」

「さあああああああああああああああせるかああああ
ああああああああああああああああああ!!!!」

廊下ならどでもあるような規定を大いに無視しまくった全力疾走&
急停止で俺達の前に再び現れたツインテ。
どれだけ全力を使ったのか肩で大きく息をしていた。

「よ、漸く、追いついたです」

「あ、お疲れ、これ飲む?」

「あ、どうも」

疲れた様子のツインテにさり気なく飲み物を渡してやった。
塩を大量にブチ込んだ奴を。

訓練後の為に俺が用意してる奴を強烈にした奴だ。

「ゲツハッ！ごふ！がはっ！な、なんですかこれえ・・・」

「塩水だな」

「己、貴様ルカ様に近づいて何をするぎなんでゲホッ！！」

「お前な、男と女が一つの部屋の中ですることなんか決まってるろが」

「ツ！？」

「お勉強です！他に何もありません！」

「なんかそういう対象じゃないんだよねルカ子」

「がはっげほっ！ぜえ、認めませんです！」

咳き込みながらも自分の信念を押し通そうとするツインテ。
どうやら俺がルカ子と一緒に居る事が気に入らんようだな。
それなら対処法があるじゃないか、久しぶりに俺らしいな。

「おい、ツインテー！」

「ネリアはツインテじゃないです！」

「ルカ子を掛けて決闘を申し込む！」

「はあっ!?!」

「ちょ、クトウさん!?!」

戸惑いの声を上げるルカ子。

すまん、今の俺の状態を現わすなら、こついうことなんだ。
俺に、俺が戻ってきた。

「受けるか？」

「……ふん、精産器の癖に決闘とは……いいでしょう、
受けるです」

「ネリアちゃん!?!」

「すみませんルカ様、だけど、引けないんです」

「奇遇だな、俺もそう思ったとこだよ」

「このブタ屑男には」

「この痴女には」

「ルカ子は渡さない！（です！）」

ニヤツと互いの顔を睨みつけ、仇敵の存在をライバルとして変質させる。

ここに、ルカ子争奪戦が決戦。

「ルールは相手の一番大事な場所に触れた方が勝ちだ！」

「なんですそのルール!？」

「だってお前強いだろ？」

感じ取れる存在がオルガロンよりも強烈なんだよね、違う意味でも。たぶん普通に喧嘩したらぜってえ勝てない。そんなわけでハンデを要求した訳だ。

「！なるほど、バカではないですか」

「ああ、ただのウンコマンだ」

因みに訓練場に引き返した、あの場でやったら通路通る人の邪魔だし。訓練を指導してたクネール姐さんがポカンとしていた。

「俺の大切な場所は解っているな、ナニだ」

「うっ……！わ、わかったです」

「で、お前は？」

「へっ？」

「だあらてめえのテクニカルポイントはどこかって聞いてんだよ」

「うっくっ……！」

やばいこの女堪らん。
はらいたいw

「うほっ！んんん！さて、決闘を始めようかwww」

「うう、汚されてしまったですルカ様」

「ええ〜・・・つと、それじゃあ両者前へ」

「おっけー」

さてと、準備するか。

「ちょっと待ってください、クトウさん。なぜ脱ぐんですか？」

「え？何か問題が？」

「大在りですよ?!」

「それよりこの試合早く終わらせないと勉強の時間がなくなっちゃ
うぞ」

「・・・・・・解りましたよう」

しよぼしよぼと返事をするルカ子。

よし、調子戻ってるな俺。

「バ、バカじゃないですか?!」

「いいや、俺は救世主^{へんたい}だ」

「私はよく変だと言われてたですが、お前の頭は大変です!」

なんだと、失礼な。

自覚はあるけど。

「両者とも位置に着いてください。よーい、始め!」

「やってやるぜ!」

「ちよ、手をワキワキさせながら!」
「ちくんなんです!?!」

再びルカ子のペタペタ魔方陣を貼って貰っていると、ルカ子が話しかけてきた。

しかしそれは俺の予想していた物とはまったく違いました。

何故敬語。

「女の子、実は苦手なんじゃない?」

「……………」

「3秒以上目を合わせないし、私からじゃないと絶対触れないし、何より変態的な行動セクハラはするのに傷つける行為は絶対にしませんしね?」

「うっせ……………」

なんで、わかるんだよ。

「先生ですから、生徒の癖は早く見つけ出さないといけないんです」

「人の心を読むな」

驚くじゃないか。

「ふふ、すいません。それでも私、本当に学校の先生だったりするんですよ?」

「ふーん」

やばい、俺今顔赤い。
でも膝枕されてるから逃げられない。

「今日は外で青空教室でもやりますか」

「……そうだな」

気持ちいいな、と素直に思った。
どちらがとは流石に言えないけど。

ル」はあ……訓練しましょゆ……」

五話 新キャラ登場です(後書き)

次は短編補完だよ！

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（前書き）

そんなわけでここまでの日常をば。

短編集的なものを突然やりたくなっただ

クトウくんの城の中での評価

とある城に住まう衛兵。

「変態だな、でも話してみたら面白い奴だったよ」

とある街に住まう衛兵。

「変態だが、中々骨のあるやつだったよ」

とある城に住まう料理長。

「変態だ。しかし食いつぶりは気持ちがいいな」

とある城に住まう掃除係。

「変態ですね。でも、見知らぬ女性には親切ですよ。顔も悪くないです」

とある城に住まう武官。

「変態だよな、お前もそう思うだろう？ だけどクネールさんが認めるだけの根性はあるよな」

とある城に住まう文官。

「変態以外の何物でもないですね。しかし意外と仕事教えると早く覚えてくれるんですよ。特に決算とか」

とある城に住まう給仕。

「顔いいのに変態ですよ。正直中々優良物件だと思いますよ、変態ですし」

とある城に住まう女性管理官。

「はい、変態ですね。で、でも少しくらいはかっこいいところも」
「ニョコニョ……」

とある城に住まう教導長官。

最も難しい事は三つことは、秘密を守ること、他人から受けた被害を忘れること、暇な時間を利用すること

M・キケロ

ネリアと晚餐

「おい持ってきたぞ」

「おおー！来たですか！とつとそこに座るです！」

ツインテがバンバンと自分の隣を叩いて座る様に促してくる。月をバツクにしてみると中々シユールだ、月を叩いているように見えるから。

銀髪が月の光によく映えて、一瞬かぐや姫なんて言葉が思い浮かんだ。

「酒酒酒酒酒」

言ってることはそこらの飲兵衛な親父と変わりなかったが。

「ほれ、今日はエビチリを再現してみたぞ」

「エビチリ？なんですかそれ？」

「まあ、食ってみるよ」

「言われずともです！」

俺が手渡した皿をひったくり、旨そうに口に頬張ってゆくツインテ。その姿はとも俺の一つ下とは思えないほど子供っぽく見えた。

ま、俺が16だから当然っちゃ当然だが。

さて、何故前回の最悪の出会いから俺達が仲良く飯を食ってるかというのだ。

ある日俺がふと窓を見ると、何やら向かい側の屋根に奇妙なツインテールがすげー悔しそうに俺とルカ子を監視していた。

夜になつてもその気配が消えないので、いい加減ブチ切れた俺がその屋根に向かって出来上がったばかりの身体強化で一っ飛び、ツインテに事情を吐かせた。

どうやら俺がルカ子に余計なことをしないか有給貰って監視していたようだ、暇なこつて。

そしてその監視用装備をみると、いくつかの酒におつまみとカップラーメンっばい何かという不健康極まりないラインナップ。

仕方なく俺が厨房借りて料理を作って持って行ってやったら、最初は渋っていたものの一口食べればはいこの通り大喜びで頬張る始末。そんな訳でその日から監視者気取りのツインテに毎日料理を持って行ってやることになった訳だ。

代わりに俺も酒を飲まして貰っているので、要は体の良い晚餐の理

由作りだ。

俺も妹もザルなので、結構楽しみながら飲める。

未成年だが、バイトの先輩とかに付き合わされたりした経験が役に立ったようだ。

「ん〜！ピリツとした味わいにプリッとした食感！やるじゃねーですか！」

「そらどーも」

バシバシと俺の背中を叩くツインテ、こいつ絡み酒だからめんどくせえんだよな。

目を眺めつつツインテと晩酌、正直微妙と言わざる得ない。これがクネールさんとかだったらもうちょっと燃えるんだが。

ルカ子？なんかあいつそういう対象にならないんだよね、あの後もなんか会話に詰まるし。

で、ツインテだが、こいつこの年で女捨て過ぎだろってくらいだし。しない。

「くは〜っ！この為に生きてるなあーですー！」

こんな感じだ。

確かにうまいけどさ。

俺は酒も食事も静かに食べる派なんだよ。

絡み酒超うぜえよ。

見てる分は楽しいけど。

「お前そんな恰好ルカ子に見られたらどうするんだよ」

「今の時間帯で起きてるのはお前くらいです。ったく、私の身にもなれってんです」

「知るか」

俺は確かにエロゲとかの為に寝る間も惜しんでたから某借金執事如く睡眠時間でも、今、つまり深夜でも起きてても大丈夫だけどさ。こいつの気合いの入れ方には引く。引くけど面白い奴だから付き合っ。ちよっとルカ子とギクシャクしていたので、こつこついう気を使わない異性は俺にとって希少だしな。

「パシヤツとな」

「うにゃ!?!」

「んふふ〜」

「ちょ、今何したです!?!」

「ん〜何かな〜。あれね〜こんなところに酒に目のくらんだまじな
い女が写ってるぞお〜)c<v・」ナンくん

「んなつ!?!」

こんな感じだからかうとメツチャ楽しい。

「ぐっ……どうしたいんです……」

「んん〜そうだなあ、どうして貰おうかね？」

「ま、まさか下着を!？」

「てめえの下着とか誰得だったの、俺は好みはクネール姐さんだっつってんだろ」

俺とこの世界に来ていたスマホに着いた紐を指に掛けてクルクル回す。

同時にニヤニヤ、声真似でc v . コナン君。

これでム力つかない奴はいない。

最近コナン君の子供っぽくない演技にはイライラさせられるからな。ツインテもブルブルと俯きながら拳を握っていた。

「ねえねえ、どんな気持ち?こんな間抜け面を撮られてルカ子に見せつけられるのってどんな気持ち?」

「っ!!!!!!!!!!!!がっ……がががががががっ!!!」

正直、この後良くボコられるけど面白いです。

あのクソ弟子の謎の機械が屋根から落ちて宙を舞うのが見え、私は躊躇わずにその身を投げ出し機械を掴みとった。それと同時に身体を包む浮遊感。

(あ、やっちゃった)

身体は女の子の自分が自ら言うつと凄惨落ち込むのだが、これなら神とも戦えると自負できるくらい丈夫だ。

だけどこんな風は無茶をすると、いつもルカ様が泣いてくれた。

ルカ様を心配させちゃ駄目なのに。

ルカ様に嫌われちゃったら私は生きていけないのに。

なのに、また怒られてしまう。

身体の浮遊感は徐々に地面への落下へと変わっていくのが分かる。

そしてそれを自分ではどうしようもできないのも。

身体の丈夫さは神様級だが、結局神ならざる身の私は、空を飛ぶこともできないのだ。

また、ルカ様に泣かれちゃう。

嫌なのに、そんなことをさせちゃう自分も嫌なのに。

私はどうして繰り返してしまっただろう。

ルカ様の為にやっているはずなのに、行動がいつもから回ってしまっ
う。

あのクソ弟子にしたってそうだ。

あいつを排除しようとしたら、ルカ様にとっても怒られてしまった。

あいつが救世主なのはわかる。

二重にも施された封印の強さを見れば一目瞭然だ。

だけど、私だつてできるのに、今のあいつより役に立つのに。

そのことが許せなかった。

だから姫様からあいつの魔法戦闘を鍛えて欲しいと言われた時チヤンスだと思った。
これかっこつけければ、あいつをボコボコにして少しくらいは気も張れると思ったから。
なのにあいつは、

「おい、大丈夫かよ」

ム力つく程に善人だった。

あぶねえあぶねえ。

もう少しで落ちるところだった。

にしても身体強化のバリエーションには基本とはいえバカにできない物があるな、やっぱ。

俺は今のところ身体強化しかまともに使えた試しが無いのだが、ルカ子曰く『才能がありません』らしい。ひでえ。

それでもなんとか落下寸前のツインテの腰を掴んで足の指で屋根を挟みこんだ。

うん、これも結構ギリギリ、いやキツイ。

やっぱ俺じゃこれが限界だよな、足の腱がメツチャブルブルしてる。どうしようか。

「なんで・・・」

「あん？」

「なんでお前は・・・」

なんかツインテが話しかけてくる。

ごめん、それ長くなりそうですか？

自分で早く上がってくれないとキツイんだけど。

「なんでお前が救世主なんです？」

「しらねーよ」

あ、やべ、つい本音が。
ま、いつか。

「救世主だからってルカ様とイチャイチャしていい訳ではないです
！」

「え、俺ルカ子とイチャイチャしてたの？」

「えっ？」

「えっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あ、臆がそろそろ限界。

「あれをイチャイチャと言わずになんというんですか！」

「いや、俺正直女の子に苦手だし。青春とかしたことはないし」

「ルカ様もなんか満更でも無いしです！」

「恋愛とか解らん。初恋とかしたことないから、多分ルカ子も違
うと思うなあ」

「はっ？ぶざけてるです？」

「ぶざけてねーよ。そんな風に考えていつも思い出すのはさ……」

「……母ちゃん、だよな。」

「……」

「だから、何黙ってただよ。お前がんな気にすることっちゃんえだろ」

「……」

「あ、それとさあ」

「……なんです？」

「ごめんなさい」

「へっ？」

足限界。

ついに限界の訪れた俺の指が屋根を離してしまった。
そして当然の如く落下していく俺とツインテ。

そう思つて身体強化を今できる限界まで強度を上げた時だった。目の前に魔方陣ができあがった。

「っ!？」

「なんです!？」

空中では身動きがとれず、魔方陣への激突は止められない。せめてもの防御に腕を交差した時だった。

ポヨーン

そんな気の抜ける感じで空中に跳ね返された。

そのまま屋根根まで跳び上がりなんとか着地、事なきを得た。急ぎ地面を見てみると、あの魔方陣は既に消え去っていた。

「? 一体何だったんだありゃあ」

「まったくです。ま、助かったからよしとするです」

「そりゃそうか」

「それで、これはどうするんです?」

掲げたツインテの手には俺のスマホ。

「それは破壊するなりなんなりでいいわ」

「えっ?」

「えっ」

「……は? いや、これ大事なものじゃないですか?」

「いや、俺が悪かったし、悪ふざけが過ぎたわ。すまん」

悪いことした時はちゃんと謝らんな。
ギリギリまで引っ張るけどな。

「……」

「お、酒余ってんぞ。どうするよ」

「……はあ、悩んでた自分が馬鹿みたいです」

「そうそう、悩むと白髪が増えるらしいぜ」

「銀髪だから関係ねーです」

「そうそうか」

そんな宵の一幕。

おまけ

「まったく、また無茶して。私が魔方陣書かなきゃどうなったと
思ってるんですか。また2人で飲みだすし。あ、またネリアちゃん
が絡んでるます。むむむむ……、何故か苛立ちます」

向かいの窓から屋根で晩酌しているバカ共を監視している魔導管理
官より。

短編集的なものを突然やりたくなったんだ（後書き）

結構長く書けたな。

六話 強く成る過程は全て飛ばします(前書き)

だつてめんどくさいんだもん

六話 強く成る過程は全て飛ばします

「シッ！」

「はぁ！」

「隙ありだな」

「これをこつしてあねをこつしてああしてこつー！」

「シイイイイイイイイイイイイイイイイット！！3対1なんて無理だぁ！」

「これくらいで根を上げてんじゃねーですー！」

「ざけんなツインテ！てめえら最近ガチでやるじゃねえかよー！」

「リミッターは外してないからセーフだ」

「そりゃないぜクルーネ姐さん！」

「これはどうですかね？」

「火柱！？ルカ子貴様殺す気か！？」

「だって避けられるんですもの」

「避けなきゃ死ぬだろアレ！」

自分が行動したこと全ては取るに足らないことかもしれない。しかし、行動したというそのことが重要なのである。

ガンディー

冒頭からも解ったと思うが、俺は訓練中だった。だった、というのは、ツインテの拳が俺の顔面に突き刺さっているからだ。

身体のダメージは限界、つまりこれで試合終了である。

バカアン！

風船が破裂したような派手な音と共に俺の身体が殴り飛ばされた。散々ボコボコにされてきたため、身体に支障がでるような痛みは無い。

うまく跳んで衝撃も減らせたし、受け身もなんとか取れた。しばらくすれば回復できるだろうが戦闘は今日はもう無理。

あれから魔術の練習がてら、ルカ子からペタペタ回復魔方陣を貼って貰えなくなった。

なので痛みでばやける頭で思考しながら、回復術式のイメージを固めて行く。

前にルカ子に習ったのだが、魔法とは自然界におけるマナを活用する技術の総称で、学問としては大きく二つに分かれるらしい。

まず俺が身体に回復を促している魔術。

己の身体を媒介とし、内に秘めたマナと大気中のマナとを操る術。魔術を使う為には強烈なイメージと才能、魔との繋がり必要な為、モンスター被害などが少ない国や地域では使える人が少ないそうだ。魔術を言い現わすなら、個人使用の格闘術と言ったところだろうか。次にルカ子が主に使う魔導だ。

これは人工的に創りだした術式回路を使って、間接的に魔法を行う

導き。

魔方阵と呼ばれる機関を創り、そこにマナを込める事で、科学的に誰でも魔法を使う事が出来る方法。

ルカ子の言っていた魔法と科学が合体した姿だ。

言うなれば、魔導師は魔方阵を創る職人だろうか。

他にもマナを活用する術は全て魔法と呼ばれるのだが、おおまかにはこの二つが一番多いらしい。

「お疲れさまでしたクトウさん」

「おう、お疲れ」

ルカ子が寝転がってる俺の隣りに現れた。

膝を着き、土に汚れるのにも構っていないようだ。

こいつ、やっぱり調子が狂うというかなんというか。

「うん、大分良くなったな。2か月前が嘘のようだぞ」

「あー・・・もうそんな経ってるんすか」

この世界に来てもう2ヶ月。

これだけ経てば、向こうの方は一体どうなっているだろうか。

妹は、一体どうしているのか。

覚悟を決めた癖に、今さらながらホームシックにかかりそうな気分だけ。

「なに湿っぱい顔してんですこの変態」

こいつが居なけりゃな。

実際一番俺が接しやすい異性つつたらこいつだ。

「黙れ、そして腐れ」

「んな状態で悪態疲れても悔しくもなんともないです」

なんとも腹立たしいことに、奴はわざわざ屈んで俺のほっぺを突いてきやがった。

これがクネール姐さんとかだったらわくわくなのに、目の前のクソツインテはとても意地悪くニヤニヤと笑っている、最悪だ。

「ふう、我々相手に一人で10分か、破格だな」

「逃げるだけなんです」

「それでもだよ」

うう、訓練中褒めてくれるのはクネール姐さんだけだぜ。結構年いってるとか言っでごめんなさい。

「さてクトウ、そのままでもいいから聞け」

「え、はい」

なんだろ突然。

いつもは立つまで回復してから批評なんだが。

「で、どう思う？ 私は及第点だと思うが」

「そうですね、この少なくともそうそうは後れをとらないでしょう」

「………ム力つきませんが、さっき一撃当たっちゃいましたからね。合格にしようとしてやるです」

あれ、なんだろう。

みんな俺の事褒めてる？

いつもは『お前後ろ向きになると動きが悪くなるんだから攻める攻める！』とか、『魔術は己のイメージを完成させなければ十分な存在を持ちません。だから死んでも完成させてください』とか、『魔術師名乗りたいなら周りと自分のマナを空気を吸うようにコントロールするです！ああもう、そればっか意識してるから足が止まるんですこのグズ！』とかばっかだったのに。

やばい、ちよっと泣きそう。

でも合格とか及第点とか一体何の話よ。

ルックス？

肉つき？

それとも俺のケツ穴の緩さの改善は………されてないな。

未だにお腹攻撃されるとときどき漏らすもんな。

しかも結局魔術も身体強化以外まともに使用できなかったし、・・・
・・・マジで才能ねえ。

まだ救いなのは俺が救世主としての魔力の量の多さと、身体強化の
バリエーションを全て教えてくれるだけの師がいたということだろ
うか。

これが無かったら完全に俺落ちこぼれだったな。

・・・泣けるぜ。

そんな俺が合格とは一体何のことだろうか、ホントに。

「実は訓練を終えられるかどうかの試験を受けられるかどうかテス
トしてたんです」

「マジで?」

「はい、結果は見事合格ですよ」

「・・・マジで?」

それなら、今までやってきたことは無駄じゃなかったのだというこ
とか。

俺は、また一歩ヒーローに近づけるとい事なのか。

・・・笑ってない、俺は笑ってないぞ。

「だが、勘違いするなよ?」

「ひよ?」

「もしこれに合格できなければ」

「さらに厳しい地獄くんれんが待っているという事を忘れないことです！」

ああ、そうか。

俺はもう、強くなるとか、まだまだ弱いとか、そういう環境で訓練してた訳じゃなかったな……。

こいつらもうホント容赦なく俺の劣等感ごとボコボコにして鍛え上げてくれた。

ツインテは別だけど、他二人にはもうなんか逆らう気がしない。

おかげ身体と逃げ足は強くなったと自負してるが、正直魔術とかは魔法関連は微妙だな。

今まで魔法の環境が無い場所から来た奴がイメージ固めろって言われてそうそうできることではない。

文字通り、常識という垣根が違う。

俺はこれをまずブチ壊さなければならなかった。

ちよつと人間的に壊れてると思っていたが、さらに壊れた。

このことに関しての説明はルカ子から説明されていたのだが、今さらビビることでもないし、めだかボックスでも人間は互いに洗脳し合ってるようなものだったからそこまで抵抗も恐怖も無かった。

あるいは既に壊れ始めていたのだろうか。

ま、別にいいけどね。

この世界の常識に染まってしまつて永住するにしても、時々帰るくらいはできるだろうし。

魔導の方はなあ〜。

まだ字が読めないから魔方陣すら描けない。

ここは文化の違いが立ちはだかつて来た。

俺の英語の成績とかはお世辞にもいいとは言えない。

そういえばなんで文字は分かんないのに会話はできるのだろうか？
……ファンタジーでそれ考えたら終わりだな、やめようやめよう。

にしてもイイ笑顔だよな、お前ら。

ルカ子、お前がそこまで嬉しそうな笑顔初めて見たぞ。

「試験内容は明日の朝に姫様が謁見の間にて伝えるそうなので、今日はこれで終わりです」

「マジで、勉強も？」

「ええ」

それは嬉しい、身体を休める時間ができるなんていつ振りだろうか。朝から昼まで訓練、昼から夜まで勉強という生活をしたからな。時々モンスターの駆逐とかに参加してたけど、後方で見学させられてばっかだった。

なので純粋な休みというのはこれが初めてと喋っている。ならば急いでベッドで寝たい。

身体を全力で休めたい。

うわ、一度気を抜くとドツと疲れてきたぞ。

「んじゃ、もう行っていい？」

「ええ、いいですよ。ゆっくり休んでください」

「やった〜」

フラフラと立ち上がる。

なんとか歩く程度は回復したようだ、これなら一人で部屋に戻れるだろう。

これ以上話すのも億劫になってきたので、歩きながら手を振ってその場から離れた。

クネール（以下ク）「で、どうおもう？あいつ」

ルカトエーゼ（以下ル）「ええ、身体の方はあの年代の人としては完成に近いと思いますよ」

ク「さんざん動き回らせたから当然だな。そこはいいんだが、問題は持って別だろ、ネリア？」

ネリア（以下ネ）「・・・正直気に入らないですが、です」

ク「あいつは正にセンスの塊だよ、思い付きが足付けて歩いてるといつてもいいが、あいつの成長速度は目を見張るものがある。型に嵌れば伸びるだろうな」

ル「魔術の適性は低いですけど、身体強化という術への理解の早さとバリエーションへの考案は我々にはない発想がありますからね。文字はなかなか覚えられないですけど」

ネ「マナ概念を経った着込んでる最中はどうなることかと思っただですが、意外とすんなり受け入れてものに始めてますです」

ク「中々おもしろい出来上がりになったな」

ル「あるいは、とんでもない物を目覚めさせてしまったか」

ネ「そっういやクネールさんは救世主の奴と闘ったんです？どうでしたです」

ク「・・・ああ、あれは反則だなと思っただよ。もしあのままで鍛えていれば、必ずめんどくさいことになるのは明白だったよ」

ネ「どんだけです!？」

ル「封印の方も嚴重に施してありますから、そうそうは破れないと思うんですけど、何せ救世主ですからね。世界の意志をどこまで抑えられるか」

ク「無事、合格してくれるといいんだがな。そういえばルカトエーゼ、試験の内容とは一体何だ。今のあいつなら余程なら遅れは取らんとと思うが」

ル「うーん、姫様も教えてくれなかったんですね。明日教えるからって」

ネ「……それ、なんか怪しくないです?」

ル「……」

ク「……」

ネ「……」

ク「……死ななければいいな」

ル「……いざとなったら私が止めます」

ネ「……同情するところでしょうかです」

六話 強く成る過程は全て飛ばします(後書き)

感想がほしいです!

あとお気に入りあざーす

七話 戦地だって、やばくねえ？

「朝、四時だぜ……」

「我慢してください」

「ねむっ……」

「我慢してくださいってば」

「いやだってねみーもん、まだ深夜だろ」

「私なんて突然書類作業手伝わされて寝てないんですよ」

「お前の睡眠時間がどうかしらねーよ、俺はねみーよ」

「とにかく、謁見の間での不敬ってホントはメチャクチャ罪になるんですからね？この前みたいなのが許されたのだからってクトウさんが救世主だからですよ？」

「罪深い男だぜ」

「ほんとにお願いしますよ、主に私の胃の為に」

「わーたわーた、今回は大人しくしてるよしてますでしょ？」

「……本当にですね？」

「『beyond the bounds』歌ったらダメかな？」

「だーかーらー」

他人を負かすってのはそんなむずかしい事じゃないんだ・・・もつとも『むずかしい事』は！いいかい！もっとも『むずかしい事』は！『自分を乗り越える事』さ！

露伴

岸部

「んー・・・あーう・・・？」

「姫様！起きてください姫様！」

ども、間部功刀です。

今試験内容を聞きに姫様の居るあの忌まわしき記憶が残る謁見の間にやってきたとです。

そしたら姫様含め大臣っぱい奴らまで全員コクコクと眠りこけっちよっつとです。

一体何が起こったのかわからんとです。
クトウです・・・クトウです・・・。

ネタはこれくらいでいいか、さて、ホントに何が起こったし。
寝てない大臣っぽい奴も居るが、必死に目を見開いていることから
余程眠いんだろう。

この国つてもしかしてブラック？

結構、いやかなり心配になって来た。

どうなってしまうんだろうか、俺の試験は。

この場合ってかなりヤバそうな案件を押し付けられるよな、漫画と
かだと。

リアルモンスターハンターくらいは覚悟してたけどさ、これ以上ヤ
バイ案件って。

「あーおにいちゃん」

「何この子かわいい」

お年頃の女の子って感じの寝ぼけ姫様。

思わず鼻を押さええそうになった、中々やるじゃねえっすか。

「しけえんのほづはねえーじちゅはーぐりゅむどりあのほじゅじゅ
どーでおねがいしてやいのー」

「うん、すっげえかわいいんだけど言ってることわかんねえ」

「！?？どういことですか姫様！」

「あ、解るんだ。ルカ子すげえ」

おい、読みにくい文章で読者離れとかよくあるんだから！
なんとかしろよ作者！

「グリムリバーの軍勢が北西の我が国とグルムドリアの合間の山地からやってきてるって向こうから連絡があったのよ」 実際はもつと眠そうです

「グリムリバーが!?!」

「そう、グルムドリアのバカ共も遂に救世主を召喚したって聞くし、救援要請もでちゃってるから放っておけないでしょう? だからここ3日くらいは徹夜で特攻作業だったんだけど、もうちょっとかかりそうなのよね」 実際はもつと眠そうです

「だから、クトウさんに足止めをと・・・?」

「そういうこと」 実際はもつと眠そうです

「ならせめて私にも同行を・・・!」

「それは無理ね。私たちもう限界だし、貴方には軍編成の最終調整とかやって貰わないとね。なんせ初めての遭遇なんだし、極めて努めて承って慎重に微細に入り浸るまで、しつかりやっとなきやいけないんだからね」 実際はもつと眠そうです

「くっ・・・!」

読者の方々、君達は恵まれてるな。
文章変わったろ？読みやすくなったろ？
でもこつちじゃ聞きとれねえよ。なんて言っ
てんのかまったくわかんねえよ。

俺の話なのに俺置いてけぼりだよ。
助けてくれよ、ストレッチマン……。
ま、結局どうしたってやることは決定なん
だろうからやるしかないか。

えっと、グリムリバー……聞いた事ある。
これぶちのめせってか？おけおけ、任せとけ。
とりあえず未だに議論し合っているルカ子
とおネム姫様に話しかけるとしよう。

「まあ、そんな焦んなよ。大丈夫大丈夫、
お前らに鍛えられた頑丈さは伊達じゃ
ねえから」

「そついう問題じゃありません、死ぬかも
知れないんですよ!？」

え、マジすか。

いきなり恐くなってきたんですけど。

なあんて思うと思ったか。

あめえよ、ルカ子。

この二ヶ月お前俺の何を見てきたんだ？

「今さらだろ、それ。そんなもんで一々
ビビるかよ」

「でもっ」

「いいか、ルカ子」

ガシッとルカ子の肩を掴んで顔をグイッと近づける。

「強くなる為に、お前にもクネール姐さんにもツインテにも手伝わってもらった。けどな、最後の一步はてめえで歩かなきゃ意味が無いんだ。偶然でも援助でもましてや救済でもなく、ただ純粹に俺の意地と意志でな」

「・・・・・・・・」

「だから、行ってくるわ。早く追ってこいよ師匠」

「！本当に・・・気を付けてくださいね？」

「ああ、解ってるよ」

「ふふ、まるで恋人みたいね」 実際はもつと眠そうです

良いシーンで茶々を入れる姫様。

ルカ子真っ赤になって俺を突き飛ばす。

「ちちちちちち違いますよー！」

「そつだそつだ！俺は女に対して『オ○ンコ舐めてえ』とか思つたりするけどルカ子には全然そついうのがわかないし！それに恋人つて近くに居るとドキドキしたりするんだろ！俺はなんかルカ子と居ると胸が苦しくてギューつてなるぞ！こんなんが恋人な訳ねーだろうが！」

「へあつ？」

「あん？」

何故かルカ子から疑問符をいただく。

あれ、俺なんかおかしいなと言つた？

「イチヤイチャしてるとこ悪いんだけど、ホント時間無いからこれから出発ねー」 実際はもつと眠そつです

「えつ？」

この前飲みに行った衛兵さんがガシツと俺の両脇を掴む。

この人モンスター殲滅しに行った時の乱戦で助け合つて仲良くなつたんだけど、なんでも実験中の反魔術結界使用の鎧のテストパイロットらしく、こいつに掴まれたら魔術を発動できなくなるというチ

ート。
名前ブライアン、イケメンだ。

「おい、ブライアン。親友を死地に送り込むとはどういうことだ、せめて貴様秘蔵の酒とか土産に渡せよ」

「すまん、これも仕事だ。秘蔵の酒は今度帰って来た時に用意してやるよ」

「包装だって大声で叫ぶぞこの野郎」

「だからごめんって、がんばって？今回マジでやばいんだって」

「……………ちっ、解ったよ」

軽口に付き合わないくらい切迫してるのか、彼の表情にはあまり余裕が無かった。

「一体何が起こってるのやら……………」

覚悟は既に完了しているが。

「無人の馬車か・・・すげえ」

要人用の魔導馬車による隣国グルムドリアへの直行便。

これ揺れも少なくてしかも無人。

科学技術でもかなり手のかかる機構を、いとも容易く可能にしてしまふ魔法の力に感嘆する。

すごい、これはすごい。

楽しいなこれ。

子供みたいにそわそわと馬車を移動し、窓を覗いたり、ソファを跳ねまわったりした。

昼には着くらしいので、この国意外とでかいんだな小国じゃなかったのかと考えてふけったりと暇を潰す。

それでもその内一人の車内はかなり暇なので眠ってしまった。

そして事件は俺が起きた時に起こった。

「・・・なんだこれ」

馬車の窓にはべっとり貼り付いた何かの液体。

とりあえずナンパ野郎に身体強化で長距離ドロップキック。

「すちやちっ！」

「でゆはあっ！」

カツコよく着地して、髪をかき上げながら少女に向き直る俺。

「フツ、大丈夫ですかマドワアゼルおわあッ!？」

突然胸に衝撃が走り、思わずひっくり返る俺。

痛みを我慢しつつ良く見れば、少女が俺に抱きついているではないか。

しかし俺は別の衝撃によって胸に伝わる柔らかい感触とか、太ももの柔らかい感触を気にすることができなかった。

「やっぱり・・・やっぱり・・・お兄ちゃんはヒーローだよ・・・」

「・・・美衣か？」

なぜならその娘は俺の妹だったからだ。

え、何この超展開？

「將軍！あれをご覧ください！救援の烽火です！」

「……まったく、こんな時に面倒な。解った、私が行って終
わらせる」

喚か。

そこまで気付いたが今さら引きさがっても許してくれなさそうだったので、俺は冷や汗かきながら偉い奴が来てくれるまで暴れまわることにした。

両手剣を避け、振り切って一瞬力の抜けた顎に掌底を叩き込んだ。

あ、またやつちまった。

ていうかこいつら練度は悪くないんだけど焦って連携できてないのがなあ……、実践不足だなやつぱ。

魔術もそんなツインテみてえに人間やめてないし、あれに比べりゃ見える見える。

振り上げた瞬間に抜き手を三回叩き込んでやったぜ。

あ、またやつちまった。

そんなことを奴等がもう数人と減るくらい繰り返した時だった。

「そこまでにして貰おうか」

なんかすごい裝飾された鎧を着込んだイケメンが現れた。
漸く偉い人が来たか。

「貴様が何者かはあえて問うまいよ。今の我々には時間が無いんでな、しばらく独房で眠って貰うぞ」

「あ？それが他国の救世主に対する態度かこの野郎」

「………なに？」

偉い人が少し戸惑ったように抜きかけていた剣を停める。

「だから、俺、救世主、よろしく」

「………いやいやいやいや」

うん、まあそうだよな。

自分の国の………救世主、を奪取する為に暴れ回ってた奴が他国の救世主とか思わんわな。
俺もそう思う。

「何故このようなことを？」

「こいつ、俺の妹な訳よ」

「なんと……、不思議なこともあったものだ」

「で、こいつが男にセクハラを受けているのを見て思わずブチ切れちゃったと」

「………なるほどな。いや、失礼した」

剣を鞘に戻し、こちらに頭を下げる偉い人。
それに合わせて俺も頭を下げた。

七話 戦地だって、やばくねえ？（後書き）

こんな感じで投稿して行きます。

八話 戦争という名の地獄

「編隊組んでないっつっても壮観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷属だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなものだ
が」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死とい
うものをして見たかったな、と」

「ぶはwwwwww」

「男なら誰でも思うよな？」

「なるほど、どね、俺も」

「うん？」

「一度、アールセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐは W W W W W W W W W W」

「どーよどーよ W W W W W W」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞ」リアア！」「」」

不幸を治す薬は、ただもう希望よりほかにない。
ウィリアム・シェクスピア

冒頭より少々遡って。

「は？まって、もっかい言って？」

「間違いは無い。これが現状だ」

「……マジで？」

俺は愕然とした。

え、マジで？俺そんなヤバいところに居んの？

「もう一度確認の為に伝えるぞ。現在我々が駐留している街から北西より大型モンスターの群体がこちらに向かってきていることが大陸対策支部より報告された。数は約500と、大型モンスターの群体としては異常な集まりを見せた為グリムリバーのモンスターと断定。我々の戦力は200、殆どが実戦経験のない貴族のお坊ちゃん共だ」

頭が痛いとも言つように椅子に座り込むグラム将軍。

俺の方がいてえよ。

なんで報告と情報は正確なのに200しか引つ張ってこねえんだよ。

「上がバカでな、首都から軍を動かすのを嫌ったのだ。それで私に避難支援任務とかこつてあわよくば死んでくれという指令を出してきやがった。くっそたれ」

「しらねーよ、そこ無理でも持つてこいよ」

「これでも精一杯なんだよ。表向きは避難支援だったからな」

「え、えげつねえ・・・」

こんな国俺ならグレる。

美衣をどうやってこっちに引きこんだものか・・・。

「しかも避難は最低一日かかるうえに地形は防衛に向かない平地と
きた。どう見ても詰んでる」

「ああ、そりゃ詰んでるな」

無理ゲーってレベルじゃねーぞ。

「我々だけならば、な」

「・・・ちっ、美衣はダメだ。ありや召喚されたばっかなんだ
ろ？なら、なんでもすっから連れて行くのだけはダメだ」

「すまん、今回はその僅かばかりの可能性にも縋りつきたい状況な
のだ」

「・・・」

「・・・・・・・・」

黙って睨みあう俺とグラハム將軍。

しかしその沈黙は話題の人物により断たれた。

「いくわ」

「っ！？てめっ、何言っつてやがんだ！」

「行くわよ、私には状況はさっぱりだけど、話聞いた限りじゃ死ぬかも知れないでしょ？そこに兄貴は行くんでしょ？なら私も行くわよ」

「バカッ！お前じゃ足で纏いただけだろうが！」

「バカはどつちよ。あんまり私を舐めんじやない。たった一人の家族が死地に行こうとしてて、それが止められないってことくらいは分かるわ。そして私は待つだけで満足する女じゃないの。足手纏いになっても、あんたの胸倉掴んで離さない女よ」

「ぐがつ・・・・・・・・！」

くそっ、なんてこった。

こいつがこうなるとテコでもブルトラーザーでも動かねえぞ。

しかも言い返せない自分が情けない。

腕力の強さなど容易く越えてくる女という存在に俺は改めて争う事

は無駄と理解する。
つええ、女マジつええ。
しかもかつこいい。

「……………絶対後衛か後方、これ絶対」

「いいわよ」

「グラハム、これでいいか？」

「ああ……………」

少し笑いを堪えているグラハムにワンパンくれてやった。

場所は変わって、俺が乗って来た要人用馬車の中。
作戦を移動しながら説明とかどこの特殊部隊だよ。

「今回は少数精鋭での電撃ゲリラ戦だ。この馬車の機動力を使って敵を翻弄しつつこちらに意識を向けさせ、ペルムドン近くの谷へと向かう」

「おk、了解した」

俺とグラハム將軍、そしてグラハム將軍の部下たちが馬車の屋根で胡坐を掻いていた。

総勢5人の精鋭ね……。

美衣は数に入れねえし、単純な戦力差は100対1か。

今回はルカ子たちが俺達の信号を拾って助けてくれるまで敵を引きつける時間稼ぎ策だ。

持久戦は師匠達の熱心な訓練の甲斐あってか逃げるのは得意中の得意だ、そうそう遅れは取るまい。

「いいか、魔力を無駄にするなよ。動けなくなったら死ぬと思え」

「將軍……自分は……」

「大丈夫だってデイドル、俺達ならやれるって」

「ああ、大丈夫だ」

だから火急速やかにこの疎外感を何とかしてほしいものだ。

確かに俺は新参でしかも別勢力というチームワークを乱しかねない不安定要素だが、今回の作戦で同じ土の肥やしと成るやもしれん仲なのだからもう少し会話してくれないか。

まともに喋ってるのってグラハム將軍だけだぞ。

いや、仕事用の口調ならバイトでできるけどさ。

ここ最近訓練ばっかで軍とか男と話す機会が極端に少なくて何話していいか分かんね。

今も拳を握ったり離したりするふりをしてメツチャ聞き耳立ててる。

よし、俺もタイミングを見て参加を……！

「みんな、ありがとう、この戦い必ず生き残ろうぜ！」

「良く言った！」

「調子のいい奴だぜ！」

「帰ったら酒奢れよ！」

「え？」

「え？」

「え？」

「ん？」

励まし合っていた時の和気藹々とした空気が霧散し、部下の方々に
齊に俺の方を見る。

それに笑顔で答える俺。

「あ、そういえば救世主様がいるんですけどね」

「全然しゃべらないから忘れてたぜ！」

「そうだね」

「よし、お前ら現地までフルマラソンな」

「敵影確認！距離約2000！」

「遂に来たか！」

「闘いの狼煙をあげろい！ヒーハー！」

こいつらの事は三バカと呼ぶことにしよう。

三バカのテンションが高くてウザい。

なんか逆に冷静になって来た。

覚悟は決まってたけど、実践はやっぱ緊張度が違うわ。

しかしグラハム將軍流石だな、さっきから目を瞑って精神統一でもしてるのかピクリともしない。

「將軍どうしますか！？」

「.....」

スクツと立ち上がって馬車の先頭で剣を引き抜くグラハム將軍。

「開戦は私が飾ろう。よく見ておけよ！」

「流石は將軍！」

「かつこいいつす！」

「そこに痺れる憧れるう！」

「おい最後の」

何故貴様がそれを知っている。

その疑問の言葉は突然のマナの異常な収束によって遮られた。

どうやらグラハム將軍が魔術の基本にして奥義が一つ、収束魔法弾を造るらしい。

將軍と言われているだけあり、その収束の仕方はルカ子の魔方陣にも見劣りしない完璧な出来だった。

少なくとも俺にはこんな芸当無理だ。

だってピンポン大の収束魔法弾すら造れなかったのだから、はあ・
・。

属性はルカ子と同じ火。

階級は星の輝き級スターライトと言ったところか。

・ ・ ・ ・ ・ バカじゃねえの？って言うくらい的大型魔法弾だった。

やがて収束は圧縮へと変わり、星の光が地へと降りたつ。

「逃げ

ティタン・ノック
踏み砕く脚」

夕焼けと錯覚するほどの光が放たれ、おそらく敵の居る場所へと着弾した。

それと同時に遙か先の場所から巨大な爆発が響いてきた。

ギヤーギヤーとうるさくなる馬車の天井。
これ以上は收拾のつかないメタが繰り広げられようとしていたその時だった。

「あ、將軍。今ので増援きたっばいです、前と後ろと左右から」

「囲まれとるやん」

もうだめば。

「よし、とりあえずさっきの攻撃で手薄になった前方にてめえらの全力を叩きこめ。極めて強引に突破する」

「じゃあ親父が持たせてくれた超高級攻撃魔方阵を」

「じゃあ俺も先祖代々から伝わる秘儀を」

「あ、なら俺も俺も」

「何このノリ」

もはやカオスである。

雷やら雹風やら竜巻やらに吹き飛ばされるグリムリバーモンスター、略してグリモン。

生き残った奴等の攻撃を何とか主に余力の残ってる俺がいなして突

破することに成功。

そのままグリモン達が俺達の後を追う形になった。

ぶっねえ！マジ危ねえ！

あんなサイクロップス共に囲まれて袋にされたら一瞬でミンチだぞ！
いなした手足がまだ痺れるっつーの！

「よっしゃお前ら！作者も今後の展開に頭を抱える排水の陣だ！気
合い入れて行くぞ！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！』

でもこの雰囲気嫌いじゃないかも、ダメっぽい感じが。
グルムドリアも悪い奴ばかりじゃないかもなあ。

その後は少々の小競り合いを続けながら何とかペルムドンへと続く
溪谷へと到着したが、こちらの被害も尋常ではなかった。
現在戦力になるのは俺とグラハム將軍の2人、残りは魔力切れや負
傷によって戦闘不能となったので馬車の中に放り込んだ。
死亡者がいないのが正に奇跡だった。

「さて、どうする？隘路なら敵の数を制限できるが逃げられなくな
るぞ」

「俺に聞くなよ」

「そうだったな」

たく、こいつの無策のせいでえらい目にあっただぜ。
楽しかったけどさ。

なんか不思議と絶望はなかった、目の前にいっぱいはいだった
からな。

もしこれを狙ったのだとしたら……いやねーな。
今も冷や汗かきまくってるもの。

隘路で……時間稼ぎ、ね。

思い付く手は一つ。

でも確実に俺達の命は保証できない。

しかし最初の戦闘で結構数が減ってるし、ここまで走らされて疲れ

てる。

頭の良い指揮官とか居なくてマジでよかった。

「……やるかやらないか、勝つか負けるか、生きるか死ぬか。」

賭け時だな。

「おい、こんなのだうよ」

「うん……なるほど、」

おもしろいじゃないか」

「おい、マジで死ぬぜこれ」

「しかし、これ以上はギリ貧だしこの馬車の魔力も尽きかけだ。もとよりこんな作戦で数人助かるだけで儲け物だぞ？」

「……付き合ってくれるか？」

「もちろんだとも」

「無茶言つなよ、さっきから俺のテンション駄々下がりだよ」

谷に響き伝わるグリモンの群進と呻き声の嫌なデュエット。

「編隊組んでないっつっても壯観だなこりゃ」

「神の眷属か・・・」

「あれが神って面かよ。どうみても悪魔的だぞ」

「悪魔も元々神の眷属だったんだよ、この世界ではな」

「へー、てかこれだけ広い大陸だったら宗教も分かれそうなものだが」

「文化にもそこまで違いは無いしな、流石に地域差はあるが」

「へー。っと、そろそろか」

「何か言い残すことは？」

「んにゃ、何か言い訳っぽくなりそうだし。そーさな、腹上死というものをしてみたかったな、と」

「ぶはｗｗｗｗｗｗ」

「男なら誰でも思っつよな？」

「なるほど、どれ、俺も」

「うん？」

「一度、アールセックスというものをやってみたかったな、と」

「ぐはwwwwwwwww」

「どーよどーよwwwwww」

「最高だぜ相棒」

「団体様も歓声を上げてるぞ」

「そっか、なら」

「「「いくらでもアンコール受け付けてやんぞ」コラァ！」

そんな訳で次回に続くぞコラァ！

八話 戦争といふ名の地獄(後書き)

今度ともよろしくう！

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い

「ごめんな、美衣……」

「……行くぞっ!!」

「じゃあっ!!」

「塞いだあれは壊されるなよ!あの馬車が頑丈と言っても限界があるからな!」

「おう、わかつたっ!」

「邪魔っ!すんなあ!」

「てめえのそのでけー肉棒粗挽きにしてやんよ!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお!!」

「るおああああああああああああああああああああああ
ああああああ!!」

「生きてるか!??」

「生きてっぞ!??」

「今通信魔方阵で連絡が入った!端的に言えば三時間だ!三時間で
救援だ!」

人間、志を立てるのに遅すぎるといふことはない。

ポールドウィン

埃をはらうように振るわれた大木と地面の隙間を滑り込んで避ける。そのまま勢い殺さずに立ち上がると同時に走りだすと、ほんの一瞬までいた場所に人間一人軽く踏み潰せる巨足が振り下ろされる。

振動に足を取られ転びそうになるのを堪えていると、頭上から大木が振り下ろされるのが陰でわかったので、転びそうになる勢いを利用して地面に吸い付くような体勢で何とか走る。

身体の着地を気にせず思いつきり飛んだ。

何とか大木の着弾までには握り付近に出来る隙間に飛び込むことが出来た。

急いで立ち上がり、地面から離れようとしている大木に飛びつく。

そのまま木偶の坊が大木を構えなおすまでしがみ付き、引き戻す運動が最高速に到達する瞬間に木偶の坊の顔に向かって跳んだ。

モンスターに感情があるかどうかは知らんが、かなり間抜けなツラして大きな顎められた目ん玉に、肘鉄を喰らわせてやった。

悲鳴を上げて仰け反りながら倒れる木偶の坊をクッションにして再び地面に降り立った。

ここまで、二分。

はつきり言うとかかなりギリギリ、二回は死にかけた。

おいおい、三時間以上とかマジで言ってるのか？

冗談じゃねーっつの。

こんなん三十分も持つかつつの。

でもやってやるしかないのだ、ここで俺が倒れば、あの塞いだ道をあいつらは無理矢理でも通っていくだろうし。そうなりや美衣が危険だ。

「くそつたれがあ！」

攻撃はもう狙えない。

あんな無理矢理な動きは俺の身体に負担をかける。

持久戦を主眼に置いているのに力尽きては本末転倒だ。

幸いにも俺の事を警戒しているのか、不気味な呻き声をあげながら

木偶の坊どもは俺を囲みつつも近づいては来ない。

このまま膠着状態が続いてくれると嬉しい、休憩入れないとマジでキツイ。

1、2、3、4、5、6、来たか。

ギリギリの最小限の動きを意識して、俺は散歩するように前に一步踏み出すと、後ろから風。

6呼吸、十分だな。

次はバク転するように数メートル跳びあがると別の大木が通り過ぎる。

恐い恐い。

本気で恐い。

あんなもんが直撃したら、一溜まりも無くお終いだ。

いくら身体強化を施しているとはいえ、俺のは大魔力を一気に使いきるスーパースายヤ人を超えたスーパースายヤ人ではなく、効率化を図ったスーパースายヤ人2の状態なのだ。

攻撃力より機動力をとった結果だ。

着地と同時に回転するように2歩半下がる、振り下ろされる大木。

三度、たった三度の攻撃でかなりの神経を磨り減らした。

幸いツインテのような重みもスピードもあるバケモノ級の攻撃ではないが、当たれば負けという構図は中々精神的にくるものがある。

一撃の重みのプレッシャーにどこまで耐えきれぬかが鍵だ。

ルカ子たちの訓練によってメンタル面もフィジカルも比べようも無い程鍛えられてる。

後は俺がミスらなければデカイのは当たらない。

横に足を大きく開いて身体を前に倒し蹴りを避ける。

急ぎ立ち上がり、振り切られた足のかかたとにタックルを喰らわせ木偶の坊のバランスを大きく崩す。

質量の違いが痺れた肩から伝わり、思わず顔を顰めた。

「まったく、異世界モノのチートな主人公たちはこれ以上のドラゴンとかを下位と蔑みつつ楽々と殲滅していたりするが、実際相手取ってみると種族差というものは度し難い。」

「クマにそこそこ鍛えた程度の人間が戦って勝てるかつつーんだよ、無理だよ普通。」

「チート主人公は魔力（笑）が使えるからいい物の、何故か俺は全然ダメだったしよお。」

何かあれだ、容量はでかいけど出口は蛇口程度みたいな感じ。

何とか一拍置けたので素早く二回程呼吸をすると、強張っていた身体の緊張が程良く解け、モチベーションが上がった。

「ダッシュでその場を離脱し、再び困いの中央へと躍り出た。倒した訳ではないのでさっきと数は変わらない。」

「俺では決定打に欠けるうえに持久戦で攻撃のリスクは背負えない、自然と先程の繰り返しになる。」

唯一つ違うのは、先程より明らかに俺が疲れているという事だ。

誰かを護る為の戦い。

それがこれほどまでに疲れるものだとは知らなかった。

なるほど、これを背負って戦えるのか、ヒーローと言う存在は。」

「おもしれえじゃねえか」

「ニツと口角をねじ上げた。」

「そうだ、これがヒーローだ。」

俺が求めた最もわかりやすい力だ。
萎えそうな気がどんどん内から湧き上がる想いに消されていく。
やってやる、やってやるよお！

「かかって来やがれてめえら！」

先程の戦いで興奮したのか、妙な唸り声をあげる木偶の坊どもに世界のフィンガー・ファツキューをくれてやった。

「はあ……はあ……げえ……はああっ」

避ける。

とにかく避け続ける。

俺に許された行動はそれだけだ。

それ以上は俺の領分を越えている。

グラハムの存在すら頭から追い出さなお避ける。

おそらく、もしグラハムの死体がそこに転がっていたとしても俺のやることは変わらない。

引き付け、避ける。

ただそれだけ。

「おおおおおっ！！・・・ぜえぜえ・・・だりゃあ！！！」

しかしどれほど続けただろうか？

手足は灼熱のように熱く、頭と視界は霞みがかって来た。

限界は近い事も理解していた。

既に時間の感覚はない。

一瞬一瞬が命の削る戦いだ、神経は全て戦いに向けている。

だが、それすら危うい。

先程から攻撃が掠る様になってきた。

生傷があちこちにでき、だがそれを気にする時間も与えんと敵の攻撃が遅い来る。

先刻よりは疲れたのか勢いが衰えたものの、敵を400としても1対200の数の差だ。

元気な敵は腐るほどいる。

狭い隘路は敵が囲みに動くスペースがあるとはいえ、攻撃できるのは一体程度、ローテーションで動けば延々と攻撃できるが、一斉に

襲い掛かってくるよりはマシだ。
動きも疲れで雑になってきた。
魔術の組も甘い。

気力だけは緩めず、敵を睨み続けた。

後方に跳んで攻撃を避けた。

カクンツ・・・!

「しまっ・・・!」

着地と同時に限界の着ていた膝の力が抜け、思わず転んでしまった。
そして頭上よりやってくる大木。

「・・・っ!」

右腕を盾に思いっきり歯を食いしばった。

ゴキイツ!!

「が・・・あ・・・!!!?」

痛みから素早く頭を切り替え叩きつけられた身体のどの部分に負傷があるか集中して考えた。

(肋骨・・・5本・・・右腕・・・粉々に折れてる・・・背骨・・・大丈夫・・・内臓・・・肺と胃にダメージか・・・！)

追撃を身体を無理矢理跳ね起こして避けると、着地と同時に激痛に耐えきれず膝をつく。

「はぁ・・・！はぁ・・・！」

間違いなく重傷。

動ける傷ではない。

ならば動けるようにするだけだ。

身体強化のバリエーションが一つ、新陳代謝の向上。

ルカ子から習って訓練後に使ってきた自己治癒を高める術式を使えば、この程度の怪我なら処置可能だ。

あいつらとの訓練ならホント死の一步手前まで逝ったことあるからこの状況でも割と冷静。

問題はそんな時間が存在しないってことだ。

だが、使わないよりはマシだ。

術式を組み、発動。

しかし同時に攻撃も来る。

1、2・・・！

瞬時に術式を切り替え避ける。

2秒では内出血も治せないが、呼吸できる程度には回復。まだまだ回復とは呼べないありさまだが。

攻撃の衝撃で土埃が宙に舞う。

敵もこちらも、一瞬だけ姿を見失う。

これ幸いと、再び回復の方へ術式を変えた時だった。

どうやら勝利の女神は俺の事が嫌いのようにだ。

目の前に大木で造られた棍棒が現れた。

「
ッ！！？」

一瞬、全ての感覚が消える。

やがて浮遊していることが分かり、それが永遠に続くような錯覚を経て、地面に叩きつけられた。

「あっ……！があ……！？」

頭を強く打ったため、視界がぼやけていて、まるで万華鏡のようだと場違いなことを思う。

そして次第に感覚が戻っていくと、両腕がうまく動かないことに気がついた。

あの一瞬でどうやら反射的に防御したらしい。

見事にご臨終なされていた。

息もなんか溺れたようにしずらい、どうやら肺に肋骨が刺さったらしい。

一つ一つ理解して行きたびに、己が生き残る可能性がもう殆どない事がわかる。

だが、心は穏やかだった。

今にも死にたいほど痛いのに、その心だけは、いつも通りの思考が働いていた。

（あの木偶の棒にもオスとかメスとかいるのかねえ〜）

なんというか、逆に覚悟が決まった。

こうもどうしようもない状況だと、穏やかに最後を向かい入れてもいいと思える。

訳が無かった。

（許せねえな。クソいてえじゃねえか。男はメスにして女は全員孕ませてやる）

ぐつぐつと静かに燃えたぎるマグマが、俺の心を焦がしていた。だが、その身体はもう指一つ動かせない。

（ごめんな、美衣。バカな兄ちゃんですよ）

最後の抵抗も、ゆっくり近づいてくる足音によって掻き消されていく。

(ごめんな、少女よ。俺、ヒーローになれなかったわ)

俺は、身体力を抜いて、ゆっくりと目を閉じた。

「……ッ……」

地面を大きく弾きながら回転しつつ起き上がる。
踏み下した豪脚が地面を揺らす。

「・・・・・・・・・・」

半歩身体をずらした。

振り被られた大木が脇を通り過ぎて行く。

「・・・・・・・・・・」

不思議な感覚だった。

まるで夢を見ているような、一俺が俺を眺めているような《・・・・・・・・

見てきた未来を辿る様に、敵の攻撃を避けて行く。

軌跡は緩やか、しかし移動はキレがある。

これが重傷者と疑うような動きだった。

そして、俺はある場所を目指していた。

ゆるり、ゆるりと。

後退しながらも、その位置に辿りつく為に。

確かにその身からは血は流れ、骨は軋み、血反吐を吐いていた。
だが、踊るようなその動きは一向に止まらない。

遂に、俺は辿りつく。

この動きを持ってしても、これ以上身体は動かない。

動く必要も無かった。

「大丈夫ですか？クトウさん」

「ちっ、まだ生きてやがったですか」

「よう、元気そうで何よりだ」

なぜなら、今の俺をみてまったく動揺していないクソ師匠達が現れたからだ。

「おせーよ、クソ共」

ここで俺の意識は途切れた。

九話 戦闘描写が難し過ぎて生きてるのが辛い(後書き)

と思ったけど、なんか書けたので。

次回は知らない天井編。

十話 ヘッドの上よりこんばんわ

「コペルニクスショック!？」

「あ」

「あん?」どこどこだよ」

「……………ペルフォニア」

「……………お前誰だよ」

「……………」

「新キャラだ、無口っ娘だ」

「……………」

「え、何この紙?これ読めって?」

「……………」

「『無口って呼ぶな!』……………いや無口ちゃんお前」

「……………」

「……………無口じゃない、慎みと言え」。……………いや、ねーよ。無口以外の何物でもねーよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・『うるさいバカ』。筆談めんどくせーよバカ」

「・・・・・・・・（プイッ）」

「はいそっぽ向かれました！・・・・・・・・あれ、これ日本語じゃね？」

「・・・・・・・・」

「『ようやく気付いた間抜けめ』。ついでに激痛も蘇って来たよバカヤロー」

「・・・・・・・・（アセアセ）」

「『大丈夫！？』。大丈夫じゃない、死にたい」

「ツ！？・・・・・・・・（アセアセ）」

「『だだだいじょうばbbbbbbbb』。落ちつけよ、そして医者を呼んでこいよ、俺の精神が激痛でマッハだよ」

「・・・・・・・・！！（ダダダダ）」

「・・・・・・・・なんだあいつ」

「スペシャルエ・・・（ガバツ！）」

あり？なんだここ？

てかこれ冒頭でもあったよな。

・・・冒頭ってなんだ、何言ってるんだ俺。

えーと、俺は間部功刀で16の身長163でヒーローで変態でクソツ垂れで今現在ちょっと腹の調子が悪いを確認できて全身包帯だらけだ。

・・・うん！いつも通りだな！

訓練してた頃もこんな感じだったもんな。

介護してくれた人が女の人だったからおむつ替えてくれる時はオツキしてしまいました。恥は無い、後悔も無い。

今回の違いと言えば精々簡単には治せな・・・。

あれ、なんか違和感。

具体的に言えば股間辺りから。

なんて言うか、常におしっこしているような違和感って感じ。

ちよ、なにこれなにこれ。

ガタガタ・・・。

「おつふっ」

激痛に顔を顰めるも、なんとか首を動かして違和感の正体確かめようとした。

そこにあるのはベッドのわきに備えつけられた袋から股間に伸びている管のようなもの。

「なん・・・だと・・・！」

そこで俺は気がついた、この違和感の正体に。

いつ洩らしても大丈夫なように・・・チンコに管突っ込んでやがる・・・。。。

なんてことだ。

よくわからないけど、なぜかとても敗北した気分になる。

男としての本能だろうか。

あ、でも結構これはこれで・・・。

いや待て！何を言っているんだ俺！

いいか、お前は看護師さんが「はい、おしっことりますよー」って言うてくれる機会を失っているんだぞ！？

はっ、ならまだ大丈夫だ、俺にはまだ排泄物リサルウェポンがあるじゃな・・・！
再び感じる違和感。

こっ、ケツにピッタリというか固い感触。

ま、まさか・・・！

「お、お丸がケツにセッティングしているだもおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「！！！」

俺はこの世の理不尽を呪いつつ、叫んだ時の激痛によって意識を失った。

そして話は冒頭に戻る。

「……………！（アセアセ）」

「クトウさん、大丈夫ですか？」

「あー・・・ルカ子か？大丈夫じゃない、呼吸が辛い」

「肺に骨が刺さってましたからね、外科で何とかしないとイケなかつたんでそこは魔方陣とか使ってないんですよ」

「ヘーソウナンダー」

「鎮痛剤を打つんで、我慢してくださいね」

「・・・！！（アセアセ）」

「『私はどうすればいいのか』？座ってる」

「・・・！！（スクツ）」

素直でよろしい。

ルカ子はこの間も俺に手慣れた様子で注射を打っていた。

「はい、これで終わりですよ」

「あんがと。で、こいつ誰よ？」

「ええと、グルムドリアに隣接しているペルムドンとは別のリフエ
ルリアという隣接した国家があるんです」

「その救世主さんと」

「・・・・・・・・・・！（コクコク）」

「『どうだまいったか！』。何にだよ。そのリフェなんたらから来た救世主さんがなんでここに居るんだ？」

俺の苦悶の表情が消えて安心したのか、筆談のペースが上がった無口っ娘。

全体的にフリルの多い服装をしており、日本語の筆談だったくせに金髪のプロンドで緑眼という日本人離れた容姿。

顔は整っており、服装も伴って可愛い系。

無口を通り越して筆談なんてものに頼るがその内容は結構遠慮が無い。

「・・・・・・・・・・なんつーか、この世界にあつて来た奴等に相応しいキャラの濃さだ。」

「・・・・・・・・・・（カキカキ）」

「『あなたのお名前は？』。名乗る時は自分からにしないで、礼儀です」

「・・・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『佳織・フレデリカ』？ドイツ人のハーフか？」

「・・・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『よくわかったね』。俺、ゲルマン民族信仰してっから」

「・・・・・・・・・・！（カキカキ）」

「『本とか読んで覚えたの？』。ああ、エロ本だけだな」

「ッ！？」

なんか普通にいい子だな、なんで筆談か知らんけど。

真っ赤になって伏せてるとホント人形みたいに可愛いというか。思わずセクハラしたくなってくるというか。

その邪な考えを見抜いたか知らんが、ルカ子が咳払いして注意を促す。

「えっと、私も時間が無いので、すぐ仕事に戻らなければならないのですが」

「あ、そら大変だね。治療ごっそっさんでした」

「いえ、そちらはついでで、本題は別にあるんです」

「え、何？」

「記憶喪失という事は無いでしょうが一応聞いて置きます。クトウさん、あの激戦はどこまで記憶にありますか？」

「？」

激戦っつーと・・・・・・・・あり過ぎて良く分かんない。

「すみません、覚えがあり過ぎてどれか分かりません」

「?・・・ああ、クトウさんに見てみればそうでしたね」

今の言い方ちよつとイラッ、と来るな。
事実だからしょうがないけど。

くそっ、いつか絶対おっぱい揉んでやる。
そして決め台詞をだな・・・、

『これが俺の必殺技だ、惚れるなよ』

こっ決めろ訳だ。

最高じゃね W W W W W W W

「クトウさん、ぶっちゃけちゃえばグリムリバーのモンスターとの
対戦の事後報告ですので、今の会話無駄です」

「ええ!?!」

「無駄です」

「そこわざわざ繰り返すなよ!?!」

なんか俺の妄想ごと切り捨てられたようで精神ダメージがパネエ。

「まあ、それは短編の方でやるとして、問題はこの子のことです」

「丸投げだー……」

がんばれ作者。

「……この子実は、召喚先の国から逃げ出してきてるんです」

「あん……?」

「……」

そりゃ……一体どういうこつたよ?

ギャグ思考をシリアス思考に切り替え、ルカ子が続きを話すのを待つ。

「戦闘中にグリムリバーのモンスターがどこかへ引き寄せられるように突然引き上げていったので、追撃してみたらこの子がいたんで保護して事情を聞いたんです」

「んで?」

「……どうやらこの子」

「……………！」(ギョツ)

フレデリカが耳を塞ぐ様子に、俺はこの先の事実が決して軽いものではないだろう事を確信した。

「召喚された国の王に……………レイプされかけたようですね」

「……………」

「……………！」(ギョウツ)

……………やべ、ちょっと眉間に皺寄ってんな。

「……………まあ、詳しい事は聞かねえけどよ。そいつどつすんの？」

「……………匿う事は難しいでしょうね。彼女救世主ですし、国との契約も当然交わしているでしょうから、居場所の特定もそうは掛らないでしょう」

「ふーん……………」

「……………(フルフル)」

……………たく、一難去ってまた一難か？

くっだらねえ現実ばかり押しつけやがって。

「で、お前はどうすんの？」

「……………?」

「いや、お前はどうしたいのかって聞いてんの」

「……………」

俺は、まだそれを認める程愚かでも賢くも無い。

どうするかなんて二の次で、助ける理由も付け焼刃。

だけどそれでも構わないとは言わない。

人は結局、自分の欲望を愛すのだから。

その時思ったことを、やりたいようにやるだけだ。

だから俺は助けてやるのかな？って思うだけ。

後は、目の前のコイツしだいだ。

「偉そうなことも優しい言葉もかける気ねえから率直に聞くけどさ、あんた助けてほしい？」

「……………!」(コクコク)

「なら、言わなきゃ伝わんねえぜ？お前なりの言葉で伝えなきゃ、俺は助けていいか分からない」

「……………」

「で、お前どうすんの?」

俺の言葉に目を見開き、筆談さえ忘れてただじつと俺を見つめ続けるフレデリカ。

やがて口を開き、そこから嗚咽しながら何かを吐き出し始める。

「たす……けて……?」

涙を流し、つつかえながらも言いきったフレデリカに、俺は気負いなく自然に答えた。

「ああ、任せとけ」

ヒーロー第二の試練ってか?

「もう、勝手なこと言わないで下さいよ」

「いいじゃん、言うのはタダだろ？」

あの後フレデリカは筆談でお礼を言いながら退出し、ルカ子と共に今回の事後処理に関する報告を受けていた。

「……私はもう行きますけど、本当に、あの子どもにするつもりなんですか？」

「……策はあるよ」

「まさか殴って説得するとか言っくんじゃないでしょっねっ？」

「……はは、まさかー！」

図星でした。

「……向こうは国王ですからね？グリムリバーがついにここまで侵略してきた状態で国際問題とかやめてくださいね？本当は連携組んで動かなきゃならないんですからね？」

「だあああああああもつうつせえよお前！」

ルカ子の苦言を叫んで誤魔化す。
ヒーローの試練は中々度し難い。

「……それにしても、女の子苦手なのにやさしいんですね。ク
トウさんは」

「そらお前、女の子だからな」

女の子は大切にするものだって、母ちゃんもサブカルチャーも言っていた。

「ふーん……」

なんか納得いかない、そんな顔のルカ子。

しかし俺は何が言いたいのか解らないので、微妙に居心地が悪い。
ルカ子がこういう態度でるのは初めてで、俺はそれをいつも通りに
ふざけてスルーすることが出来ない。

モヤモヤとした感情が、再び俺の胸を支配した。

とりあえず視線は逸らす。
三秒ルール三秒ルール。

「……ふふ、まあ、許してあげましょう」

「……んだよ、たくっ」

悪態をついてみたものの、すげーカッコ悪いと自分でも思った。
まるで母親に怒られているような気分だ。

「じゃあ、ゆっくりしてくださいね。お疲れさまでした」

「……ああ」

部屋から出ていくルカ子の背中に、俺は聞こえるか聞こえないかの返事を返した。

「……たく、一体何なんだよ。」

そう思っていたら、鎮痛剤が切れて来てまたナースコールでルカ子
を呼び出した。

十話 ベッドの上よりこんにちわ（後書き）

まさか入院体験が役に立つとは……。

あれ、ホント男としての何かを持っていてくれる。

俺は即答で尿瓶で！ってお願いしたのに。

そろそろストック切れるな……毎日更新はどうしたのか。

短編という物をやるよ(前書き)

直重はしねえよっていってよるこへ

短編という物をやるよ

クトウ（以下ク「君と一緒に居たい」

ルカトエーゼ（以下ル「だって好きですから」

ネリア（以下ネ「ぎゅーっと抱きしめて欲しいです」

クネール（以下クネ「ずうっと、一緒に居たい」

ブライアン（以下ブ「邪魔されたくなしね」

佳織（以下カ「……………『ルランランランラ〜』」

姫様（以下ヒ「……………いや、姫様ってなによ。作中に名前出てないからってこれはあんまりでしょう」

ク「だって聞いた覚えねえし」

ヒ「ま、それもそうね。ならば改めて名乗りましょう。私の名前は、ファルネーゼ・アーリア・ドネ・ペルムドン。ペルムドン王国の王」

ブ「姫様あ！！最高っす！」

クネ「ブライアン、興奮しすぎだ！」

ブ「ぐはっ！？す、すいません、隊長。興奮しすぎました……………」

ク「ブライアン、ちょっとお前も来いよ（ボソボソ）」

ブ「ん？どうしたんだいクトウく……って何認識阻害魔方陣
で姫様のパンツ覗こうとしているのさ！ぜひお伴させてくれ！」

短編という物をやるよ(後書き)

すみません。時間なくて極端に短いです。

夜に一気に投下します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852x/>

俺、不器用ですから

2011年10月28日08時07分発行